

蹴球

第 八 號

昭 和 十 六 年

東 京 商 科 大 學 蹴 球 部



昭和十六年四月卒業生送別會 於中野（一月寫）辰美野 卒業生前列右ヨリ

高橋 吉田 清水 早野 荒川 吉澤 堀尾 金井ノ八兄



昭和十六年四月卒業生送別 於豫科グラウンド（十月寫）卒業生 前列右ヨリ

二人目 堀尾 清水 吉田 金井 早野 吉澤 荒川 高橋ノ八兄



巻 頭 言

鈴 木 英 二

静かに惟ふ時、我々は商大蹴球部傳統の息吹を聴く。創立以來十有余年の間、幾多我々の先人は忍耐と苦闘と、燃え上る血と熱とを以て、茨の道を踏み越え、強く、正しく、生きて來られた。それは恒に烈しい闘ひであつた。

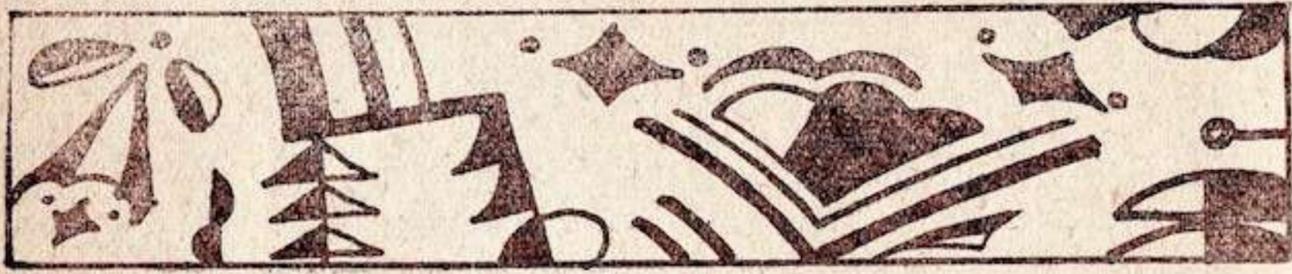
今やリーグ戦は數旬の後に迫つた。リーグ戦、逞しき若人の胸は血は躍る。それは聖大なる戦に臨まんとするもの、武者震である。

リーグ戦、それは商大蹴球部のもつ有ゆる力の發揮せらるゝ戦である。部員三十余名が互に相援け、互に相信じ、一致團結、相携へてぶつかる戦である。

百事惟れず。困苦に克ち、有ゆる障害を突破して闘ひ抜かねばならぬ。

今や世界は擧げて戦亂の渦中にあるの時、我々は商大蹴球部員たる責務を肝に銘じ、心身一切の力を盡し、惑ふことなく、動ずることなく、敵を粉碎せずんば己まざるの闘志もて、最後の一瞬まで精進しなければならぬ。

前進の秋は來た。眞紅に燃える闘志を孕むで、黙々として進むのだ。一步一步を踏みしめながら。



蹴球(第八號)目次

卷頭言.....鈴木英二

特別寄稿

松本兄へ.....川村通郎(1)

送別文

調子といふこと.....枝村藤三郎(3)

部員感想

諸兄去り我亦去らんとす.....片山亮夫(10)

無オケラのタワゴト.....藤村木塚(14)

のらめき.....山田杉太(15)

唐人の寝言.....宮田久(18)

病むらさきの色.....水島澤(19)

そそののの.....青瀬木育郎(24)

先輩通信

そそののの.....豊田達晴(25)

蹴球部員感想.....岩崎寛(27)

雑感.....金井虎雄(29)

希望.....西内賀野(31)

感者.....古賀野和(32)

感者.....松浦三(33)

感者.....高橋川(34)

感者.....助高橋川(35)

感者.....金原川(36)

感者.....荒川正三(37)

感者.....川端正三(38)

感者.....外池良(39)

感者.....佐藤裕(40)

感者.....奥村一(41)

感者.....永倉真七(42)

感者.....野尻春樹(43)

戦果.....加藤(44)

戦果.....野尻春樹(45)

戦果.....野尻春樹(46)

戦果.....野尻春樹(47)

戦果.....野尻春樹(48)

戦果.....野尻春樹(49)

戦果.....野尻春樹(50)

戦果.....野尻春樹(51)

戦果.....野尻春樹(52)

戦果.....野尻春樹(53)

戦果.....野尻春樹(54)

戦果.....野尻春樹(55)

戦果.....野尻春樹(56)

戦果.....野尻春樹(57)

戦果.....野尻春樹(58)

戦果.....野尻春樹(59)

戦果.....野尻春樹(60)

戦果.....野尻春樹(61)

戦果.....野尻春樹(62)

戦果.....野尻春樹(63)

戦果.....野尻春樹(64)

戦果.....野尻春樹(65)

戦果.....野尻春樹(66)

戦果.....野尻春樹(67)

戦果.....野尻春樹(68)

戦果.....野尻春樹(69)

戦果.....野尻春樹(70)

戦果.....野尻春樹(71)

戦果.....野尻春樹(72)

戦果.....野尻春樹(73)

戦果.....野尻春樹(74)

戦果.....野尻春樹(75)

戦果.....野尻春樹(76)

戦果.....野尻春樹(77)

戦果.....野尻春樹(78)

戦果.....野尻春樹(79)

戦果.....野尻春樹(80)

戦果.....野尻春樹(81)

戦果.....野尻春樹(82)

戦果.....野尻春樹(83)

戦果.....野尻春樹(84)

戦果.....野尻春樹(85)

戦果.....野尻春樹(86)

戦果.....野尻春樹(87)

戦果.....野尻春樹(88)

戦果.....野尻春樹(89)

戦果.....野尻春樹(90)

戦果.....野尻春樹(91)

戦果.....野尻春樹(92)

戦果.....野尻春樹(93)

戦果.....野尻春樹(94)

戦果.....野尻春樹(95)

戦果.....野尻春樹(96)

戦果.....野尻春樹(97)

戦果.....野尻春樹(98)

戦果.....野尻春樹(99)

戦果.....野尻春樹(100)

特別寄稿

松本兄へ

川村通

拜啓御手紙ありがたう御蔭で此の夏は去年よりらくに過せさうだ、餘程具合がいゝから安心してくれ給へ、大兄のところは如何、又めつきり寒さが戻つた鹽梅だが皆さん御元氣だらうか、君、例によつていそがしからう、それにかういふ世の中になつては何がどうなる事やら、兎にかく大いに頑張つてくれ給へ、落合がお邪魔したつてね、おかげで少しづゝ目鼻がついて行くだらうどうか今後も導いてやつてくれたまへ。

さて酉松會々名の解説をせよとのこと、恐縮した。あれは今考へると妙に凝つて考へ落ちといふやうなもので、洵に汗顔の至だ。誰が見ても何の意味やらわからぬのが尤もさ。見る人々の勝手にどうなりと理窟をつけてくれているのだけれど、それでは餘り無責任な話だからあんな字を選んだ心もちだけ一寸誌さう。酉松なんといふ熟語は勿論ない。つまり新發明だ。一字づゝの意味ならば、酉といふのは成熟する、稔る、又は、老ゆといふことで、それに方角を示す字としては「酉」といふ意味をもつ松はいふ迄もなく松の木のこと。そこで酉松と續けて、城西の國立（丁度、宮城の殆ど眞西に當る）なる母費の庭の老松といふことから學窓をはなれて世に出てもいつまでも諡らぬ同志の心に譬へてみた。松は古來めでたい木の隨一とされてゐるが、

それを一々擧げてはきりがなからやめる。只一橋の舊校の門内に亭々たる老松が數多あつて赤煉瓦の建物と相俟つてナカ／＼印象的な趣をなしてゐたことは誰しも同感だらう。國立は、まだ見ないが松の多いことをかねてきいてゐる。勿體ないことだが明治天皇の御製（明治三十九年）に「故郷木」の御題で

すみし世にかはらぬものは昔より老いたりとし松ばかりにて

とあるのを拜し、これに因みまつりて同學同志のオールドボーイたる我々らの會名に西松の二字をつけたく思つた。それからもう一つ。初め會名を選ぶ手がかりにもと思つて、ふと、昔の蹴鞠のことを調べてみたところ、鞠を遊ぶには、競技場（鞠壺又は鞠の懸といふ）の四隅に切立といつて、松などを植ゑる、今の蹴鞠ならばコーナーフラッグを立てる所である。よく着物や器物の模様にも柳に更蹴鞠を配したところがかいてあるものだ。それは、普通長に櫻、巽に柳、坤に楓、乾に松を植ゑるのが習ひだつたから、その中で繪として面白い柳とまりの取合せが人氣に叶つた爲、しかくボビュラールになつたんだらうかと思ふが、よくは分らぬ。又、略式には竹ばかり立てたさうだが最も正式の場合つまり宮中にてやんごとなき御方の遊ばさるゝ時などには松ばかりの定めだつたといふ。それが松と蹴鞠とは切りはなせぬつながりをもつと云へやう。此の邊大分もつて廻つた故事つけめいて苦しい様だが「切立」に松を植ゑたことはい、加減なことではない。いつ頃からこんな事が行はれるやうになつたのか如何にも日本人らしい風雅な趣向と思はれる。尙、「今昔物語」などには蹴鞠の名人、鞠の神、鞠の神、の傳説など面白い話があるが、直接關係ないから略す。まづざつと以上のやうな次第であんな字を拾ひ出したのだけれど、如水會報に書くのならば、之は「前記の御製と蹴鞠の故事にちなみ兼ねて城西の母費と盟友を思ふ心もちをあらはした」とでもアツサリしておく方がよからうと思ふ。あんまり勿體つけた説明は却つて滑稽でいかぬから、其のへん然るべくと書いてくれる誰君かに傳へてくれたまへ。いつぞや書いたものを村井君？ に上げたが、あれは、その「けまり」のことを手近にあり合せの辭典や、雜書類からぬき書きしたつまらぬものだから、なくなつてもかまはないのだよ。兎に角名は實の賓とやらで、會名は少々へんてこでも會そのものに末永く彌々榮えて、益々立派なものになつてくるやうにと祈る。それにつけても會員諸君、わけても出征

中の人々の無事を祈つてやまない。

次に、如水會報を見てゐたらふと、松平宣夫（山本）君が今春來病臥といふ記事が目に入つた。どうしたのだらう。若しや自分のやうな病ぢやあるまいかと案ぜられる。誰か様子を知つてゐるだらうね。永く病む者の苦勞はなか／＼言葉に盡せぬものだが、別して時局柄、若い盛りの身を病牀に横へてゐるのはさぞつらからう。

早くなほつてくれるとい、がなあ。前後したがいつぞやは寄せ書ありがたう。皆に序の時よろしく。それから、舊友諸兄の御厚情によつて、かねて誂へておいた木の寢臺が一昨日やつと出來て來た。値段は二十八圓五十錢也。至極簡便な組立式のものだが大きくてしつかりしてゐるから寢た具合はことに好い。お蔭で涼しくはなるし、手鏡にうつる外の景氣は一段と遠くまで見えるし、うれしくてたまらぬ。殊に屋根の棟越しに中京街道（雪ヶ谷驛の側を通る往還）がほんの少しうつつてみえるのでそこを双眼鏡で、往來の人や車を眺めるといふたのしみがふえた。本當にありがたい。どうか、諸兄にお會ひの節はくれ／＼も宜敷お願ひする。

頓首

八月廿五日

松本 兄

研北

通生

（私信でしたが松本様の御許を得てそのまゝ掲せました——係）

調子といふこと

枝村藤三郎

スポーツには調子が悪かつたとか今日は當らなかつたとかいふ半ば愚痴めいた言葉がつきものである。事實調子とか當りと

いふものが非常に大きな役割をして、試合の結果を左右することがよくある。これを征服して常に同様な状態でプレイを仕續けるのは困難な事だ。これは身體の具合のみによつて決定せられるものでもないらしい。土曜の夜は早寝をして充分に眠り節酒節煙等凡ゆる攝生をして、次の日勇躍競技會等に出場しても、調子が良いどころか却つて悪い事がよくある。友の非常な好成績を残した前日に腹が痛んで寝てゐたとか、病氣上りのフラッシュであつたとかいふ場合が稀ではない。此の調子が良かったり悪かつたりする原因を極めて意識的に好調子を得ることが出来れば非常に有利であるのは勿論だ。

然らば調子を出す爲にはどうすればよいか私は常々考へてゐるのだが何でも継続的に練習して居ないものに調子が良いとか悪いとかいふことはないと思ふ。調子について何かを言ひ得る者は或事について向上の一途を辿りつゝあるからだ。毎日熱心に練習してうまくならうと努力する者のみが調子に就いて語り得るのだ。或事に於て進歩する爲には練習が必要であり、練習の途中に於て所謂スラムプが来る事は誰も知つてゐる。その中でその原因をよく極め更に一層の努力に依つてその明にされた缺陷を補はんとする者が始めて一階程を上り得るのである。スラムプだからいくら焦つても駄目だといったやうないはゞ自棄的態度をとる者に向上はない。何事も努力である。一つのボールを蹴るにも打つにも研究が必要でありどうしようといふ意志を働かさねばならぬ。只漠然と蹴返してゐるだけでよい筈はない。斯くてこのスラムプを抜け出すと其處に待つてゐるものは好調子である。しばらくの間は順風に帆を上げた如く何をやつても自分の思ふ通りの結果が得られ急に上手になつた様に感ずる。やがて又次のスラムプに進みもがいたりあがいたりしてやつと泳ぎ涉つて又一步前進するのだ。

このやうに調子といふものはそれを出す爲にも一度出たものを永續させる爲にも可なり苦心のいるものだ。例へば職業選手等も常々猛烈な練習をしてゐる。吾々の趣味とはわけが違ふ彼等はそれによつて生計を立てゝゐるのだ。従つてすべて深刻である。先生方の技術はほんの紙一重の差しかない。それなのに結果に於て大きな差の生れるのは、自己の技術を充分發揮するに必要なナーヴの強弱如何と調子の良不良である。調子を出す爲にどんな練習をどの程度にどの位の期間やつたらよいかといふことは過去の經驗から大體判斷出来るらしい。その判斷に従つて自分の調子を試合當日最高度に發揮しうるやう努力する。所

がこの調子といふものは一度最高調に達するとあとは下る一方で折角苦心して作り上げたのと思はれる程簡単に又谷底へ向つて下つて行く。そこで最高調でなくても八九分通りの調子でよいから永續させて行く方が有効な場合が多い。それにはどうするか。即ち調子を出しきらぬことである。この爲には何か普段と變つたことをして調子を抑へることが良いと思ふ。何か新しい技術の研究を始めるのだ。そしてそれが又調子に乗つて來さうになつたら又別なものの研鑽を始める。この様に古い事の復習と新しい事の勉強を續けて行くことは八九分の好調を持続するのに効果があるものだ。このやうにして自分の思ひ通りに調子を出し得たとへ小さな試合にでも優勝することが出来たら愉快此の上もない。

商大蹴球部も代々の選手や先輩諸賢の努力により基礎もしつかりと定められた。次はこの土臺の上に如何にして立派な建物をつくるかである。その爲には今までより尙一層の苦心と努力を必要とする事は勿論である。部が大世帯となるにつれてその統率にも一方ならぬ苦心があるし、所謂第一級チームを打倒する爲には尙一段の技術の進歩も必要であらう。總て衆に抜出る爲にはそれだけ餘分の苦しみを經なければならぬ。吾海軍が宇内無比であるのは、その將兵の素質が優秀であるのは勿論數十年に及ぶ長年月の間實戦も及ばぬ猛烈訓練を續けて來た賜でもあるのだ。或有名な蹴球人は高校時代夜間校庭に出てボールを蹴つたといふ。今日あるも宜なるかなである。吾々はその目標に向つて苦闘を續けてゐる間に人間としての種々な修練を經るのである。この苦難を避けやうとするものは卑怯である。

今建設の一步一步を力強くしつかりと踏みしめて進んでゐる蹴球部の諸兄に、いさゝかなりとも御参考とならばと思ひ敢て拙文をものした次第御諾解を乞ふ。

今春我々は、早野、堀尾、金井、吉澤、吉田、荒川、清水、石割、高橋の九兄を小平のグラウンドより社會に送り出した。別離は世の掟とは申せ、五年の長い月日を共に送り暮した私達として別離の情禁じ得ぬものがある。

私は今茲に送別の文を草するに當つて、兄等の嘗て部に在りし相を靜かに回想して見、想ひ出の絲は次から次へと、一つのことば又他のことを牽き出し、いつ盡きるとも思はれない。

顧みれば、我が蹴球部中興の士たる故長瀬先輩、二階堂、後藤先輩等の苦闘は見事、實を結び、憧れの一部躍進の願望成就したる時兄等は來るべき時代を背負つて闘ふべき運命を身に受けて、若々しく、潑刺とした熱と意氣を滿身に孕んで蹴球生活の第一歩を踏み出したのである。爾來六年兄等の印された足跡が如何に大なるものであつたかは今更茲に喋々する迄もないと思ふ。戦にあつては恒に部の中堅として、又常住にあつては、明朗活達にして眞摯なる蹴球人として、部に大なる存在をなしてをられた。そして又、我々を訓へ導いて呉れた良き兄であり、共に語り、共に遊んでは良き友であつた。

そも、商大蹴球部は強い愛によつて結ばれた融和と、何物にも屈せず、動することなき力を身深く持つ精神を以て茨の道を踏み越え發展をなして來たのである。それは既に部創立の時に芽生え、長瀬時代には更に鞏固に不動のものとなり、爾來蹴

球部固有にして獨特の精神となつたのである。

惟ふにこの精神は兄等九人一塊の中に、活々として顯現せられてゐるのを見るのである。別の言葉で申すならば、兄等は六年間蹴球部精神に生き抜かれたのである。この道に徹したる兄等が、蹴球部を更に一段と立派な部となし、又嘗て見ざる成果を部史の一頁に印せられたことは燦として輝き、後より歩み行く者の上に無上の訓へとなると信じてゐる。今私はこの文を草し乍ら兄等の我々に訓へ残されたものが餘りにも多く、そしてそれが餘りにも大きいのに今更乍ら敬畏の念を新にした次第である。

今茲に幾多の先人によつて創部以來承け継ぎ承け継ぎして來た蹴球部を消えない燈火に譬へるならば、兄等の時代にその不滅の燈は一段と光明を増し加へたと云ふことが出來ませう。私はその燈火を見詰めて見度い。

豫科の若く熱し切つた情熱と闘志に燃え盛る鐵火と鐵火の闘ひである浦高定期戦には不敗の戦績を残し、又豫科リーグ、高商大會優勝と兄等の豫科三年の時代は全勝の勝星を挙げられ、大學リーグに於ては昨年度部創立以來夢にも思はなかつた、Aクラス二位躍進の偉業を成し遂げられたのである。惟ふに之の間戦へば必ず勝ち、順風に帆を上げた早船の如く、眞一文字に突進されて行つた。當時の相は戦はずして既に敵を含む無敵の猛虎の姿であつた。

然し茲に兄等の戦ひのあとのみを觀て、技術に勝り、順境に育つた幸運兒であるともみるものが萬一あるとすれば、彼は兄等を識らざるも甚しいものと云はねばならない。勿論九兄は技術的に見て堂々押しも押されぬ一流の強者である。然し九兄の中豊かな天分を持つて居られた方は一人も居らない。凡て六年間汗と血によつて收められた技であつて、旺盛な研究心と捧まぬ努力の結晶なのである。就中早野、吉澤兩兄に至つては關東代表選手として選拔され蹴球部に一つの誇を残されたのである。

かく私は兄等の不斷の努力と、ものを極めんとする強い力を九兄の一人一人に見出すものであるがそれと同時に私は更に九兄の一人一人の中に、蹴球部的な純眞さと明朗さを一段と強く感じるのである。

この純眞性と明朗性こそ美しい蹴球部に一段と輝きを加へ不滅の燈火をより一層明るい燈となしたのであると私は信じてゐる。

今や世界は擧げて血腥き戦亂の最中にあり世界の國々は總力を注ぎ、國運を賭して戦つてゐる。日本も亦然り聖戰五年、日支事變も遂ひに世界戦争の渦の中に巻き込まれ超非常時の聲は叫ばれるに至つた。この日本帝國興亡の時に直面してゐる今日不撓不屈、堅忍不拔の精神力と、如何なる艱難缺乏にも耐へ得る強力な身體を持つ青年を日本は求めてゐる。兄等はそれに應へて詰襟を背廣に或は作業服に着替へて雄々しくも國家に奉ぜんの意氣に燃え立つて社會に飛び込んで行かれた。そして今管て蹴球部六年の生活で鍛へられた體力と琢磨研鑽された精神力とを以て、立派に御奉公の誠を盡して居られる。

この上は只管康健に留意されることを祈るや切なるものがある。

以上拙文數行微意を認め送別の辭とする次第である。

本三松 岡 義 彦

何事によらず、只に新しい年を迎へるのみならず、それと共に去るものは去つて行かなければならない。蹴球部に於ても、毎年迎へては送り、送つては迎へて、今年も遂に九人の大量先輩を小平から失ふ事となつた。これで我々本三としては豫科入學の時から表になり、裏になりして、導いて來て呉れた上級生全部を送り出してしまつたわけである。

今これら九人の先輩の送別文を書かうとして机に向へば、つい昨日か一昨日のやうに懐しい過去の斷片が腦裡に浮んで來る。高商大會の事、豫科リーグの事等が過ぎ去つた或時期の自分の姿と共に、かすれた風景のなつかしさで甦つて來る。そして、自分も蹴球部にはいつたばかりの時には六年も先の事など想像も出來ない程遠いものに思はれたが、今、その「六年も先の事」が目の前に迫つて、かうして送別文を書いてゐるのを想ふと全く一種の感慨を禁じ得ない。

別れると云ふ事は始めから豫定されたものであるとは分つてゐながら、全く淋しいものである。然し乍ら、去年の本三は皆それ／＼の像を後に残つた者達の中に深く刻み込み、蹴球部の傳統の上に更に新しい層を築いて行かれたのである。そして、我々がめい／＼自分なりに持つてゐる此の残された像が九兄の正しい姿であるならば、蹴球部に於て誰がどう云ふ事をしたかなどといふ事は、今更私如き惡筆によつて歪める必要は些かもない。

惟ふに、豊かな回想の泉ともなり、限りない意慾の原動力ともなる様な生活は、安直に生きる事によつては決して體驗する事の出來ないものである。それは、右に傾き、左に迷ひながら、何物にも捉はれることのない自由と、大きな廣い愛とを刻々に闘ひ取つて行かうとする生活でなければならぬし、たとへ、時にそれが外見上むしろ放縱不羈な生活振りであつても、心の奥深くには常に變らず質實な内省的な生活の理想が秘められてゐる様なものでなければならぬ。私は九兄の部生活がかう云ふものであつた事を確信すると共に、部員の質的低下さへ云々される今日、後に残つた我々の部生活もまた、甚だ抽象的な言ひ方であるがかゝるものでなければならぬと思ふ。事實優秀なる先輩として我々の記憶に残つてゐる先人は自らの行く可き途上に苦惱を厭はぬ、信念と熱情の籠つた生活を續けて來られたのであるが、結局はこの理想の光を以つて我々後輩を導いて來て下さつたのである。小平に展開された九兄の部生活を今私の胸中に浮ばせてみると、皆それ／＼に生活に一貫した基調を確保し、それ／＼に「自分らしさ」を獲得し、伸ばして行かれたのを感じて、非常な喜びと尊敬を覺えると共に、此の各自の世界に益々深みと幅の加はらん事を祈つてやまない次第である。

今、九兄は去る可くして去り、我々はまた武藏野の一隅に残る事になつた。そして新なる日の下に新なる蹴球部は形成せられて行く。然し、残る可くして残つた傳統の眞價を味はひ、更にそれを伸展せしめて行く事こそ我々のつとめでもあり、九兄に對する最大の賤けともなるのである。

今やリーグ戦を目前に控えて、各自言ふをやめて各々戰鬥部署につく可き秋である。來し秋毎の九兄の姿を想ひ、その無言の聲を聞き、混沌たる與件の中で只管ベストを盡さん事を希ひつゝ、各自の途を確固たる歩調もて踏破せん事を誓つて、此の奇妙な送別文の筆を擱く事にする。



部員感想

諸兄去り我亦去らんこそす

本三片山光夫

歩み

荊茨の道を血と汗に塗れつゝ、蹴球部は黙々と歩む人は變れど宿る心に變りなし、永遠の歩みを続ける蹴球部は恒に同じ心で躍進亦躍進をつゞける。憶へば松本大先輩らによつて産みの苦しみを經長瀬二階堂兩先輩らに依つて中興され而してこの二三年の間に蹴球部の基礎は力強く確立せられた。傳統の光は今や煌々と輝いてゐる。

この蹴球部に自分が育てられて來た六ヶ年も實に苦闘の一

路である。然し先輩諸兄のお話を聞いてみると、我等の時代は非常に幸運だったといふ感がある。今「心の故郷」を巢立たんとするに當り、過去六星霜の部生活を回顧してみる。誠に感慨無量なり。

次兄を送る

毎年感じられることであるが、今年も亦一番親しかつた次兄九人を送り出した後の春の合宿にはこれら諸兄を失つた淋しさを感ぜずには居られなかつた。そして今春はその感が一層強く自分は何だか置去りにされたといふ感じを痛切に受けたのである。

憶へば諸兄とは五年といふ長い間共に泣きともに喜んできた。數々の想出がパノラマの如く腦裡を馳け回る。豫科の時

代は實に楽しかつた諸兄のお蔭で試合といふ試合は總て勝つ事が出來た。泥濘戦の高商大會には連覇を稱へ、春の豫科リーグには宿敵慶應を賭て見事初優勝、對本科戦に於ては村井鈴木兩先輩をくやしがらせる事幾度ぞ。本科に進んでからは躍進々々の一途を辿り昨年度は遂に第一部の試合に於てAクラスに進出する事が出來た。これら總て早野兄を始め諸兄に負ふところ極めて大きい。

諸兄の足跡があらゆる點に於て大であつただけに、又自分に一番近く親しかつただけに今春かゝる多數の次兄を送り出した事は非常に悲しかつた。しかしこれも運命だ。我等はこゝで徒らに悲しむ事なく諸兄の殘されたものをしかと抱いて精進を積み益々光輝あるものにならなくてはならぬ。一致團結だ。ファイテングスピリットだ。頑張りだ。

回顧

蹴球部生活六星霜今や自分はこゝを巢立つて社會の荒波に飛び出さんとしてゐる。海賊の國で通つてゐる安藝の廣島から遙々お江戸に上つてきて商大蹴球部に入つたのはつい先頃

のやうな氣がする。然し入部以來既に幾多の諸先輩を送り出し自分は何時の間にかトコロテン式に上級生へと進み遂々最上級生となつて了つた。自分はこゝでじつと目を黙つて自己の歩んできた道を省つてみたい。

商大に入ると同時に自分は蹴球をやらうと決心した。入學當時一橋の主將淺枝さんも豫科主將の二階堂さんも共に中學の先輩だつた。これら立派な先輩を持つ後輩として必ず立派な蹴球人にならうと希つた。然し、個性の強い自分は學校の事家庭の事等にいろ／＼呼び止められて、諸兄の言にその儘従つて徹底した部生活をする決心が仲々出來なかつた。豫科の時代は正に右往左往の迷ひの時代といふべきだ。豫科一年の時である。當時の名委員長米さんには自分の心境を話して何彼と心配をかけたものだ。「蹴球部のよきなんてそんなに直ぐわかるものではない。迷ふこと悩むことは決して悪くない」とよく聞かされた。當時又「馬鹿になれ」と屢々云はれた。

然し自分は全身全靈を捧げて部生活に生きるといふやうな心境には仲々なり切れなかつた。俗に謂ふ浮氣なのかも知れない。蹴球の外に一般學生がやる總ての事をやりたいと思つ

た。何時だつたか大先輩に Sacrifice といふ事を聞かされ成程人間はこんな氣持で進まなければならぬのだと強く感銘を受けた事を憶へてゐる。

かゝる不徹底な心境で歩んできた爲に遂に破綻を生じた。完全に勝てた明治に敗れて二部へ落ちて了ふし又豫科三年の浦高には春秋共に敗けて了つた。これらの責任はみんな自分にあるのだ。

今豫科時代の事を想ひ出してみると唯悔悟の念あるのみ。どうして自分は馬鹿になり切れなかつたのだらうか。徹底した心境に立ち至れなかつたのだらうか。

本科に進んで角帽を冠るやうになつてからもこうした迷ひの歩みはつゞいた。しかし部生活を過去三年間どうにか引張られて續けて來た事によつて、蹴球部の良さといふか、ボールを蹴る楽しさといふものがだん／＼わかつてくるやうになつた。再び一部に上つて愈々シーズンを迎へるといふ時だつたと思ふ。リーグに對する心構へを固めんと自問自答した事がある。今迄迷ひ乍らも續けてきた事はどうしてか？ 結局自分は蹴球が好きだつたからである。この「好き」といふ誠に

原始的なる感情から自分はボールを蹴つてゐるのだといふ事がはつきりわかつた時、利己的な考へ方かも知れないが、これから兎に角皆について行くべく努力しようと思つた。それ以來ずつとこんな氣持である。「ついて行かう」と努力すればそこには苦しみもあり頑張りもある。ファイテンングスピリットも出てくる。

斯くの如く自分の蹴球部に於ける精神生活といふものを回顧してゐる時、自分の歩んできた道は迷ひの歩みであつたと思ふ。これを深く掘り下げて省みると、結局のところ自己の個性といふか誠に我儘な性格に歸着して了ふ。自己の性格の缺點を述べてみたつて致仕方ないので誠に表面的ではあるが自分の歩みを描いてみた譯である。

ともあれかゝる人間を正しく強く導いてすつと引張つて戴いた蹴球部、諸先輩部員諸兄には心から感謝してゐる。迷ひ乍らもボールを蹴つてきた事に對して誠に申譯ない次第だが衷心より嬉しく思つてゐる。

六年と云ふ長い月日を蹴球部と共に送つてくると、そこに

は一生涯忘れる事の出來ない數々の想出がある。而して部生活そのものが總て想出と云ふ事が出来るけれども、これらを總て語る事は到底出來ない。今これら中少しばかりを物語つてみたいと思ふのだが。

「合宿」。これこそ我が一生忘れる事の出來ないよき試練である。炎天下の夏の合宿程苦しいものはない。しかし日々の練習を終へた夜の團樂は亦格別楽しきものだ。氣候のよい爲か春の合宿は實に心持よい。箱根土地のグラウンド迄富士見路を幾度走つた事か、合宿中一番うれしい事は何と云つても先輩群の慰問だらう。

練習を終へ空腹をかゝへて家路につく。涼風心持よく武蔵野の黄昏の味はこの上なし、燃ゆるが如き夕映えの空を仰ぐや亦清々し。

凡そ會合の中で部の會程愉快なるものなし、酒豪揃ひの事としてシーズン終れば久振りの酒にどつぷりと酔ふ。意氣投合快適々々。何日だつたか荒れ廻つて座板を抜き委員長をすつかり困らせて了つた事があつたが、これも忘れられぬ想出の一つ。谷川温泉の快調。顔のきく辰巳野。シーズンオフは酒

と共に樂しか。

これ迄やつた試合の中で一番くやしかつたのは何と云つても昭和十二年のリーグで明治に敗れた事だ。尤もこの復讐は翌々年見事にはたしたけれども、この時程悲しかつたことはない。O兄M兄と共に男泣きに泣いた。之に反して嬉しかつた事は數々ある。前にも語つた高商大會二連覇等々。

かうして想ひ出を辿つてくると數限りない。苦しかつた事樂しかつた事これら總て自分の學生生活の全部だと云つてよいと思ふ。

希 ひ

今自己の部生活をじつと回顧してみた。自分は商大蹴球部の一員としての資格のない異端者的存在であるかもしれぬ。かう考へる時かゝる存在が回顧談を語るといふ事は清い部誌を冒瀆する事になりはしないか。然し諸君はこんな迷ひに迷つた人間もゐたのだと云ふことだけを心に留められて自己反省の一助とされ、ば誠に幸であると思ふ。

迷ひ苦しむ乍らもどうか蹴球部生活を全うする事が出來

たのは自分にとつて非常に幸福であつたと思ふ。今この感謝感激の念といふか幸福感といふか心から喜びに浸りながら、「蹴球部のよさ」といふものを泌々味つてゐる。蹴球部の良さ蹴球する喜びなるものは僅か一年や二年でわかるものではない。苦しみ乍ら、闘ひ乍ら無我夢中で精進してきて始めてわかるものだ。

蹴球部には甘く言ひ難い多くの美點がある。これらは自分が眞正面からぶつつかつていつてみなければ本當にわかるものではない。唯自分としては蹴球部の中に心から解け込んで黙々と精進して戴きたいと云ふだけだ。自分はこれからも商大蹴球部といふ一大家族の一員として大いなる決心である。先輩も學生も共にこの家族のムムバーとして、がつちり纏つて頑張らうではないか。蹴球部精神もて。

近時時局の重大性と共に運動する事が仲々難しくなつてきた様に思ふ。傳統をしつかり守るといふ事は誠に大切な事ではあるが徒に保守主義に陥つてはならない。時の流れといふものをよく認識してそれに即して進まなければならぬ。そこにはより多くの苦しみがあり努力が必要である。戦線に活躍

されてゐる幾多先輩の勞苦を思ひ、こんな苦しみに負ける事なくしつかりやつて行つて戴きたい。これが去り行く者の希ひだ。

無題

本二 藤塚亮策

昨年春、浦高定期戦に一對一の引分けを演じて、その輝かしき歴史を汚したのであるが、秋には必勝の自信を以て臨みたるも又々三對三の引分けとなり、強く現實否定の立場に立たされたのである。然し乍ら懦夫の爲す所遂に相對的否定の埒を出せず今春は五對零の大敗を喫し、更に深い現實の把握から出發して相對的否定を超克し絕對的否定の立場に於て精進せねばならぬことを痛切に教へられた。

○三國志に魏の曹操は天の時を得、吳の孫權は地の利に據り蜀の劉備は人の和を以て天下を三分したと云ふ。而して完全なる戦捷を得るには此の鼎立を止揚しなければならぬ。

遮莫尤も刮目に價するものは劉備玄德である。

○「電光影裡春風ヲ斬ル」と云ふ言葉がフトある友の口を突いて出た。劍道の極意を表現したものださうであるが私は妙に忘れることが出来ぬ。そして四十人が一つになつて斯る境地を示現する日を夢みる。

○夢を追ふことはよい。然し眞の實在を把握せぬ限りそれは單なる夢である。

○運動の意義を精神の陶冶に見出すも、精神の解放に見出すも自由である。方法が違ふ迄のことである。而して具體的には前者は部を形成し後者は俱樂部を作る。

○自分の生活を純粹でないと意識しつゝ生きて行くこと程苦痛なことはない。又それ程不幸なことはない。

「オケラのタワゴト」

本二 村木杉太郎

私が此の山の麓に立つて、燃え立つやうな感激と、山の彼方の青雲への限り無い憧れを持つてそゝり立つ峯を仰いだの

は今から四年半も前の事でした、山へ入る前夜私は何か美しい豫感に打震へ喜びにわく／＼としてぐつすと眠る事も出来ませんでした。そして行手の美しい豫感の裏にもちよつびりと不安が無くもなかつたのですが、頼もしい先達のある事と共に行く人々の安らかな寝顔を見るとさうした不安はどこかへ消えて行つてしまひました。

どんなに険しい山々でもその麓は穏やかなのが普通ですが私共も之と云ふ境目もなくいつとはなしに、平地から山地へと入つて居たのでありました。道は山地とはいへ、まだく／＼平坦なもので、丁度それは新緑の頃でしたので、美しい陽を受けて柔かに輝く緑の衣をつけた檜や樺の雑木林の中を仲間の人々と歌つたり譯もない事に打與じたりして進んでまいりました。皆さんも御存じで御座いませう、山へ入りますと最初は目指す峠さへも見えずまして山全體峯の姿など望むべくもなく、唯長い間人々が通つてつけて呉れた道を眞すぐさまあ云はゞ殆ど無考へに進んで行く様なもので御座います。

今から考へて見ますと、あの麓の平らかな道も此の山への最も良い登攀の路として開いた人の苦心等がしのばれます。

あの廣い裾野の事ですもの只一筋の最良の道をつける事の難しさは相當の事で御座いましたでせう。それをあの當時はまあ無邪氣と申せば無邪氣なのでせうが只もう、うか／＼として過ぎ去つてしまひました。

やがて美しい闊葉樹の林も抜け出まして行手に黒々とした針葉樹の森が見えて参りました。

ふと振り返つて見ると私達の後には新たな仲間が加はつてゐたのでした。私達は何か見貴らしい朗らかな氣持を何の反省もなく持ちました。黒い森の中のしつとりした草の褥の上に腰を下ろして、私共の見聞した楽しい思い出を後から來た人々と語り合ふのでした。しかし話の途切れ／＼にじつと耳をすますと、ほろ／＼と山鳩の聲がしみ／＼と胸に響いて、ぼとりと葉の露か木實の落ちる音に、私の心の中にも何かわからぬがぼとりと落ち込んだものがある様な氣が致しました。それでも道はまだ／＼しつかりと一本森の外れまで續いて居りました。

森を出外れますと、見渡す限りの廣い野原またその色彩の美しさはどうでせう。所謂高山の御花畠と申すのは之で御座

に感じませんでした。

やがて道は益々ひどくなつてまいりました。そして私は只管前の人々の足を追ふ丈ではなく後の人々の足場をしつかりと刻んでやらねばならぬ責任を感じ始めたのでした、それからは苦しい日々が續きました。嵐の夜も御座いました。道らしい道もありませんでした。それでも前の人々は心強くも所々に道標を立てて居いて呉れました。併しそれには只「上を望んで前へ／＼」と書かれてある丈でありました。それが私共にどんなに有難いものであるか、仲々口では申す事も出来ぬくらいで御座いました。兎に角こうした峻しい山路になりますと人々は皆めい／＼が自分の足場手掛を自身で探さねばなりません。勿論同じ手掛足場に前の人々の苦勞した跡が無いはありませんが、今では之と同じ丈の苦勞が私共登山者の一人々々に要求されてゐるのでした。しかしこうした所に彼の道標のあります時には前の人々も此處を登つたのだ。私達の道は誤つては居なかつたのだと新たな勇氣が湧き出るのでありました。

之と共に私達に元氣を與へ又氣を安くさせて呉れるは一本

いませう。夢をさそう様な薄紅色のミヤマシンジヤ、胸がどき／＼する様な黒百合、思はず口にじつとりと生つばが湧いて、手を出さずには居られないコケモ、パーマネットの御嬢さんとでも云つたミヤマオガマキ楚々としたワガザクラまだ名も知らぬ花々が一面に咲き競つてその中に身を横たへると花の息吹きが私の耳クボを擦ぐるかの様に思えて私はやゝもすると道から外れて行き勝ちだつたのです。そして自分の行くべき道が向ふに愈々見えて來た峻しい尾根に向ふものではなく、此の美しい野原を横に切つてうね／＼と楽しげにくねつた道であるかの様に思へさえたのでした。私とその横道を辿つたとしたら一時は楽しくとも今は又昔の麓でどうにも出來ぬ焦躁と寂しさを抱いて遙かな峯を望んで居る事でせう。私を此の横道にそれさせなかつたのは何であつたでせう。それは先達の人々の確固たる足取りとじつと私達を見つめてゐる清んだ眼の輝きとが私の心に再び峯への憧れを呼び覺して呉れたのでした。

再び私は振返つて見ると私共の後には更に新たな人々が加つて居りました。私は嘗てあの黒い森で感じた様な誇りは已

のロープにしつかりとつながれた仲間が居る事でした。霧の濃い晩で御互に顔も見えぬ様な時でも「おい」と聲を掛ければきつと「おゝ」と返事をして呉れる仲間じつと黙て座つても御互を繋いだロープに手をふと觸れば御互に心の通じる仲間が居る事此の事がどんなに私を勵まして呉れた事です。

昨年の暮頃でしたか雲の切目に頂を見た様な氣が致しました。今たどりついて見れば之は單なる山のこぶでありました。そしてそこに見た道標にはこんな事が書いてありました。『道は益々苦しくなる。或は行つまる様に見える所もある。だが困難になつたら尙更眞直に前進せよ。右に左に思ひ迷ふな。而して後に續く人々に何かを残せ。我が爲したる如く。』そして一碗の水がそえてありました。

こうして一時を憩うて、此の水を頂きますと先人の慰めの囁きが聞えて來ます。一方此の水は先人の汗と涙が山の氣に清められたのであらう等とも思はれます。

あゝやがて夜も明け初める様で御座います。早速出發致しませう頂は近い様でまだ／＼遠いのです。苦しい／＼と申しま

してもこうして皆で同じ道を歩けるのですから、又一面楽しい様な氣もするではありませんか。(完)

ゆ ら め き

本二山田久寧

先人の踏み分けた道を探ねてたゞ一途に經て來た五年は詩ではなかつた。繪ではなかつた。徹し切れぬ悔恨と徹し切らうとする努力の墨繪卷であつた。樂しかつたボブラの並木も荒涼とした熔岩の果も何時しか越して來た道であつた。岐路に出會し迷路に踏み込み乍らやうやつと此處まで辿り着いた。何者か、眼先にちらつき手を伸ばせば、スツと逃げる。又淋しく追驅ける。獨り悄然と果邊なき旅路を續ける淋は敢て甲虫的哲學者のみの味に屬する物でない。

不徹底な者を見ると我知らず「文句を言ふな實行しろ」と怒鳴りたい。もし蹴球部に席を置く事自體が部の肯定であるならば、一途に生きんとする事が眞實であるならば、私は蹴球する事に於て眞實をみたい。蹴球する事は禪である。難行苦

をひた隠しに隠さうとするからこそ自己に眞實でありたい。

張三李四の集つた社會は通學時の省線の様である。彼はあゝ、俺はこう考へ笑ひ涙して來り又去る。蹴球部も所詮人の身だからには、個々人は夫々の方向を持つ。「彼奴はあれだけさ」。悲しい鈍才に注せられた言葉にも彼は彼、俺は俺と徹し切りたい。部員全部の調和は一步掘下げて徹底し切つた底の底を流れる物が齎らすのみである。

勉強にも徹せず、蹴球する事にも徹し切れない弱い痴者の魂はスウィツと登つて一つゆらりとゆらめく臘燭の火である。一あふりの風は無情にかき消す。焼き盡す爲ではなく愛で被い度くてたゞ慕ひ寄る蛾を待ちながら聽ては吹き消される運命を待つ。

亡びない、崩れない者を信じて愛憎を越えた彼岸を徹底し切りたい。例へ私を理解する者がなくても。

懦夫何を迷ふ

汝等請ふ、その本を務めよ。

白雲は百丈の大功を感じ

虎丘は白雲の遺訓を歎す。

行である。眞實に蹴球する事は眞實に生きんとする相である。徹し切る限りに於て、之の相は味ある物になる。花咲き鳥歌ふ恍惚として生を樂ませるエデンの園は、無智なる者無力なる者才の鈍なる者をも入場を觀迎するに吝ではない。

私は本春愛する父を失つた。暗い。すべて暗い破烈した日の惱みと悪夢は連續して私を苦しめた。私は父の最後の息を見届けた限りに於て死の傍觀者であつた。死は徹底する者の姿であつた。死は最後の瞬間の平和であつた。何の感覺も持たない之の世から彼の世への靈魂の移轉は徹底しつある貴い姿であつた。併し死そのものは私のものではなかつた。私は冷い傍觀者であつた。自ら體驗しなければ理解されない死は私の態度を冷笑するのみであつた。不徹底は私が擱んだと思つた者をも冷酷に奪ひ去つた。徹底し切る事それは妥協ではない。調和である。體驗と事實から得た。

先人の聲をそのまゝに信じて脚下を照顧し隨處に主と作らんとして來た努力は徹し切らねば花咲かぬ。體驗せねば實熟さぬ。一つの思想に實體性を賦與すべき部生活の本質は生ま半過な要領では追付けぬ。私自身、要領と妥協で自分の醜さ

先規茲の如し。

誤つて葉を摘み、

枝を尋ねる事莫くんばよし。

隨 想

本二宮 澤 力

原稿の締切が近づいたので、慌て、筆を執つて見たもの、何を書いていゝか分らない。無理に考を纏めやうとすれば、極めて不自然なものになつてしまふので、勢ひ此んな斷片的なものになつてしまつた。

× × ×

○世評紛々波荒き此の時代に、我ばは常の如く蹴球する事の出来る身の幸福を、泌々と感ずる次第である。夫は現實を肯定し其の中に生きる小さな自己満足的な幸福感では無く、有る可き世界を形成して行くと云ふ我々にのみ與へられた建設の喜びである。商大蹴球部の力強い傳統の中に、帝國臣民の一人として其の使命を果しつゝあるは、如何にも愉快な事ではあるまいか。

○日誌にも一度書いたのであるが、自分は近頃こんな事を思つてゐる。

佐賀藩に於ける武士道の經典として傳へられるものに「葉隠」と言ふ書物がある。その文中に「武士道とは死ぬ事と見付けたり」とある。此の端的な表言の中には、昔の武士は常住坐臥見苦しからぬ死に方をすると云ふ、當然の如くにして極めて難き箴言を藏し眞に武士の武士たる所以を言ひ盡してゐる。武士道に限らず之を普遍して我等蹴球人に及ぼし「蹴球とは死ぬ事と見付けたり」と言ひ得たならば、吾々のグラウンドに於ける一舉一動は果して如何なる意味を有して來るであらうか。誠に味ふべき言葉である。現在の日本が求め尙且商大蹴球部の求める眞の人間こそは、グラウンドに於て從容莞爾として死ぬ事の出来る人間である。自分は之に一步でも近附き得る様大いに努める覺悟である。

○あるがまゝに物を感じる心、あるがまゝに人生を感激する心、それこそ若き日の特權でなければならぬと思ふ。

○暑中休暇である。遠く都塵を離れ故山に歸り、夕暮の一時泌泌と孤獨を味ひ感あり。人間が人生の道伴れとして人間を持

此れは王と云ふエトランジェーの寢言である。偶々或る一夜部誌の原稿の催促に惱まされて、こんな事を云つたのを、後に居た影法師が書き取つたらしい。寢言である以上、寢言的なるものであるが御容赦を願ふ。

人生は懷疑より始まり、謎に終る。人間は全てを否定し能はず。生を否定せんとすれば、死を肯定せざるを得ぬ。懷疑論者は疑ふと云ふ事のみは否定し得ぬ。生も死も否定せんと欲して否定し能はざるを知らば即、超越するより外はなし。眞、善、美、莊全て人間の現世より超越せんと欲する心に非ずや。即、人生の思索の窮極に辿り着く偉大なる謎を解かんが爲の假定に過ぎずや。宗教も亦之なり。

此處でふつと、吐切れた。一生懸命筆を走らせて居た影法師は慌て、キヨロ／＼した。幸ひ、この男はまだ眼がさめぬらしい。今迄書き取つた所を読み返して、何て變な事をいふのだらう。この男は頭が少し變ぢやないのかと考へてゐると、ムニヤ／＼云ひ出した。急いで影法師は又筆を取る。

人は何物をかを信ぜざれば生くる能はざるものなり。眞理

つと言ふ事は神に依つて賦へられた無上の機縁である。人は絶対に孤獨では一日も生きてをられない。人生の究竟が何であるか。生とは？ 死とは？ 虚心になつて自分と言ふものを考へて見たら、生きてゐると言ふ事を考へて見たら、人生は餘りに頼り無いと言ふ感じが迫つて來ないか。何だか自分等は掴まなければならぬものを掴んでゐないと言ふ感じがしないだらうか。自分等は夢中になつて踊つてゐたけれど握つてゐたと思つた對手の手は幻であつた。

誰でもない、人間でさへあればそして自分と一緒に心から憤つて呉れる者でさへあるならば。自分と一緒に心から惱んで呉れる者でさへあるならば。總ての人間が其の對手の踊手を探してゐる。超人でない限りは人生は一人で歩むには餘りに落寞たる場所である。幸ひ商大蹴球部に育まれつゝある我々は誠に幸福なる者と言はねばならない。

唐人の寢言

本二水 島 行

の遵奉者は眞理の存在を信するものなり。然れどもその眞理は彼の中に存するなり。白鳥の云へる如く、眞理と虚偽とを闘はすれば何れが勝つかは分らず。只從來、眞理の勝つと假定し來れるに依り、一般に虚偽は破ると爲すに非ざるか。斯くの如きは即、眞理を信すればなり。

善に於ても亦然り。道德とは何ぞ。正義とは何ぞ。試に現今の世界狀勢を眺むれば、何處にも絶対的正義は存せず。而して各國は各自の正義を有す、美も亦以上の如し。

然らば、眞、善、美等全て主觀的、個人的なるものにして客觀的眞着普通の善等は存せざるや。

又もや、ふつつりと喋り止んだ。「随分つまらない事を云ふものだな。」と黒い姿は呟く。スタンドの光が、ぼんやりと周圍を黄色く浮び上らせてゐる。外にはこぼろぎがチチ、とないてゐる。靜かな晩である。机に突ぶして寢てゐるその男丈は、後が分らなくなつたのか、時々異様な唸りを上げてゐる。然し一度鳴きそこねた鳥は中々囀り始めぬ。影法師は大あくびをしてウツラ／＼し始める途端又始まつた。

絶対の境地はあるべき筈なり。眞よりすれば眞の絶対、美

よりすれば美の絶対たるもの有るべき筈なり。歴史より見ても斯くありと信するのみなり。此處に於て、個人的眞は超個人的眞となり、絶対的眞に連る。善、美、又然り。之、即、絶対即相對の境地に非ざるか。

例ば美に就きて見るに、彫刻に於ける美と繪畫に於ける美とは結局同一のものにして、その美は史的に抽象形成されたものにして、又歴史以前のものなり。十八世紀に於ける美と、二十世紀に於けるそれとは、何ぞ異なる所あらん。只異なる所は表現の形態、把握の仕方にあるのみなり。フォーヴィズム、キューヴィズム、シュールレアリズム等の差も亦之の事なり。

眞に於ても亦然り。誠に經濟學を眺むれば、それは明かならん。何れの學說や正しきかは分らず全て正しきといふ外はなし。正しさに對する判斷には論理的なるもの、目的論的なるもの、又、存在論的なるもの等あるも、終極は信念的判斷が決定すこの故にこそ、同一對象に對しても、その道種々異なり、而も全て正しき筈なり。

眠つて居た男が急に手を伸ばした。スタンドがそのはずみ手に取つてあくび混りに讀み乍らふんと鼻をならす。それからペンを取つて書き加へる。

各人眞面目に生くる以上四十人居れば四十種類の考へ方ある事不思議に非ず。眞面目に生くるとは何ぞやと眞面目に考へる所に、生の問題も死の問題も出て来る。其處より眞の精神力も出て来る。情熱的に生くるも、理性的に生くるも、或は又現實的に生くるも何等の支障あるべき筈なし。唯、我々四十人の根底は蹴球を肯定し眞面目に生くる事にあり。絶対的、根本的なる感情は理性の底にあり。蹴球を肯定するとは蹴球が好きと云ふ感情なり。蹴球を通じて論理を立てるも、その根底に斯かる感情ありて其處に四十人が今の蹴球部を形成して居る事を忘れざれば、それにて充分なり。然る時は他の人の権利の侵害、感情の對立等全て氷解し去らん。四十人、一つになりて秋の暮。

むらさき色の色

本一瀬藤俊雄

でガタリと動く。影法師は驚いて、壁の上で躍り上る。それで一行程聞き洩らして了つた。

人間は何物をかを信じ生きて行く。然らば信ずるとは如何なる事ぞ。信ずるとは反面自惚れるといふ事なり。狂人と天才とは紙一重と云はんより、狂人にも天才的な所が幾分あり天才にも狂人的なる所があると云ひ得る如く。只、信念に依る行動と然らざる行動とは自覺を以て分つ。自覺は反省、懷疑より来るが、然し、表面的結果ば相當屢々、單なる自惚れに依る行爲の方が、良い結果を齎らす。「作家にして一生自惚れ通さばそのみにても大事業なり。」と廣津和郎の云へる、此處なるか。日々、キリストを信じ、安かに働き、死に至りてその救ひを信じ平和に此の世を去りし一老農夫と、洗禮を受け乍らも懷疑に陥り、全てが謎なるを認めざるを得なくなりし一小説家の生涯と何れか幸福なるか。前者の生き方を選ぶも、後者を選ぶも、それは各人の隨意なり。

「ウーン」と、うめき乍ら眠つてゐた男は顔を上げかけた影法師は慌て、書き取つた便箋を机の上へ放り出す。病む首筋を揉み乍ら、はつきり開かぬ目でその男は「オヤ」と思つた。

浅間山麓の林にうづもれてゐる追分の家は鶯と柔い風に夏の朝が音ずれるのである。……本當に靜かな所では音がする。そしてその音は人をきつと自然の寂しさの中に引入れて終には人の生命にまで考へさせるものである……

今夏追分の一人住ひは全く素敵であつた。一人とは總ゆる煩雜さを單純化して了ふもので、當時は、これは一人住ひだからよいのだと思ひ込まうとしてゐたが、今となつては一人でも追分だからこそと思つて時々又行つて見たくなるのである。朝未だ太陽は勿論見えな。兩側は落葉松が高く聳えて、行く先も霧が包みきつてゐる、あの朝の散歩の美しくさは忘れられない。次の朝大きな期待をもつて行つてみたけれども駄目だつた。自然の美しくしさはその抱き締められる様な強さは、只何も知らない虚心の時だけのものらしい。但し次の日から、非常に氣持のよい散歩だつた事は確かである。

信濃のコスモスと野菊を或る人は非常に賞めてゐるがあの邊の桔梗は紺色といふよりは紫色に近い程高山の冷氣を吸つてゐるよい花である。紫は大暴風の戀とは良く言つたものが紫はよい色ではないが見てゐると信濃の桔梗などは冷淡な

然し親しみのある花である。静けさの中の微かな音を感じる
と、紫色の中に解け込む氣持になる。

夜は大抵かやの中で布団に坐つて本など讀んでゐたが先輩が
僕に言はれた「一人で田舎を旅行して、本當の寂しさの中に
浸り切れば大抵の人は好きになれる」といふ言葉が何度も思
ひ起される程寂しい、むしろ一人で居る事が恐ろしい様な氣
持であつた。あの時は本當に誰でもいい、誰かと話して、一夜
でも過したかつた。然し東京などへ歸つて來ると好惡の感
日増しに強くなつて來る。

紫の氣持が僕の卒直な氣持であれば嬉しいです。

終り

病床寸感

本一青木育郎

人生には山もあり谷もある。限りなく生の喜びを感じる時
もあれば、悲しみの底に沈むこともある。喜びも、哀しみも
楽しさも、憂ひも、皆天命である。哀しくとも、さびしくと

も閉口するな、元氣を出すんだ。自分一人に白羽の矢が立つ
て苦しむ譯ではないんだ。生とし生けるものみな憂ひあり
だ。憂ひも又人生順逆何ぞ人の意のまゝならんや。つらい事
があつたら笑つて味はへ。楽しみを楽しみ、哀しみを楽しむ
心を持つんだ。雨はふらなければやまないんだ。生を刹那に
求めず一生に求めよ。生ける日の限り生きよ。青空の涯に浮
ぶ白雲を見よ。飄々として無心、一株の憂ひを宿して、しか
も楽しげに遊ぶ。

(十六、十二、十三)



先輩通信

その一

豊田達治

御手紙有難う「蹴球」を頂いて再び夢は國立の松林に戻りました。

池尾君の事もあれど氣付いて同じ隊内とは云へ分散配置なので不取敢手紙を出した處向ふでも氣付いておつた處で直ぐ返事
を頂きました。

其後彼氏幹候の試験を受けましたが仄聞する處によれば非常な好成绩で多分經理も文句なく通過し内地の經理學校へ行く事
になれるでせう。

私の方は二ヶ年の大陸生活ですつかり現地すれがしてます。無線小隊長と云ふ難かしい様なやさしい役目で本部と常に行動
を共にしてるので員數も飛ばさず(軍隊で物を失くす事を云ひます。蓋し私の生命もこの中です)やつてきました。
それでも二三回はよくぞ助かつたと云ふ目に會つてます。

早野君以下サウ／＼たるムムバーが卒業されたさうで今年は大變です。大いに團結して頑張つて下さい。

精神的要素は國軍の一大強味ですがサッカーでも同じです。君達がサッカーで體得した集團生活の妙味はやがて戰場に社會
に其精華を發揮し得る事がありません。

サッカーの卒業生達は殆んど今舉げて軍務に御奉公の誠を盡して居る様ですが之こそ正に誇つて良い事です。それ／＼幸にして歸國する時があつたら諸君と一堂に會して歡談したいものです。

既に此處でも外は日中百二十度を超えています。麥の穂波さへ埃をかぶつてうなだれてます。討伐に警備に將兵は疲れを休める暇もない位です。世界の情勢日々好轉しつつあるのもあながち他力のみでなくそうさせる日本の強味が働いてるのでせう。學生たる諸君は大いに勉強と鍛練とを心掛けて指導階級たるの要素を養つて下さい。

大學出の兵隊がサボの代表だつたのは昔の話です。又兵隊にとられるだけの身體でなかつたら之からの世間逞しい指揮官として活躍してこそ教育を受けた價值もあるのです。又兵隊にとられるだけの身體でなかつたら之からの世間でどうして頑張れませう。

皆さんの頑健なお顔を拜見出来る日も年内中にありそうですから楽しみにして居ます。では又。

昭和十六年四月二十日

その二 二階堂晴三

諸兄の合宿の様な量の生活を四月以來今日まで續けて尙數ヶ月之が續かうとして居る時、暑さにうだつてなるものかと秋のリーグ戦に對する應援を遙かに南支より送る。

偽る勿れ、隠す勿れ。

白日の下で小平で全部をさらけ出して戦つて呉れ。勝つても負けても皆が泣いて心から腹の底から泣き合へれば其でいいではないか。

必勝の信念は部を愛する。自分を愛する心に恥ぢない所に生れると確信する。

祈健闘。匆々

その三 岩崎寛貞

大變に御無沙汰してゐます。

諸兄の日頃の精進努力の成果には感謝し喜んでゐます。後藤の幸便にても新聞紙上にも諸兄の一橋蹴球部への只管なる愛情を感じ沈滞してゐる自分の此頃の氣持を涌き立たせ張切らせて呉れます。自分も相變らずの生活を致し居ります。本日出しアサヒスポーツを買つて参り蹴球祭の寫真と記事に接し新たな感概を覺えました。

寫真の中上掲のは藤塚君に捧げられた荒井先輩の英靈ではなかつたでせうか。しみ／＼故き兄の事蹴球部時代のことを思ひ浮べさせて呉れました。

後二戰充分眞價を發揮せられ「鎧袖一觸」される様祈上げます。

昭和十五年十一月十日

その四 金井雄吾

其後御無沙汰しました。本日は松本大先輩、二階堂、大掛と先輩の中樞と共に本三一同打揃つて箱根行と洒落込んでゐられる御便り頂き、懐しいやら、嬉しい、妬しいやら、いやはや萬感交々胸に満ちて、長い間繪書に見惚れて會社から歸宅して飯を食ふのも(小生にとつては大切ですぞ)忘れさうでした。大先輩方と飲み且つ食ひ、大いに胸襟を開いて語られ何物にも代へ難い貴い收獲を得られ、今後の、又一生の確固たる方針を建てられた事と思ひます。松本先輩の有難味は本三で知り一生忘れられないものですが、其の大きさは薄氣味悪い程で底が知られず、我々小輩の到底圖り知り得ざる所です。二階堂先輩は僕は御交際願ふ事少く口はどつたく言へませんが蹴球部を育て、呉れた恩人であり、技術的にそれよりも精神的蹴球部を作り上

げて下さつた方の様に部誌から拜察されます。大掛先輩に就てはとやかく小生の言ふ迄もありません。兎に角之だけ人格者を集めた先輩の精粹と共に飲み明かされたとは小生等聊か以上にヒガミとする所です。人と所と時を得られた諸兄の幸福たるや正に空前絶後の物でせう。秋の前祝として之以上の物はありません。お目出度う!!

あの葉書の今一つのニュースは茂木君の再入部でした。茂木君の離脱當時小生の氣持としては茂木君程精神的內容の豊富な人が去るといふ事は蹴球部の精神的に何か缺けて來た證據ではなからうかと思ひ、非常に寂しく、残念であり、茂木君の爲にお氣の毒にも思ひ、氣持の一端でも親しく伺ひ度く思つてゐたのです。又小生等の如きガチャ／＼組が氣に入らなかつたので

はなからうかと不安でしたのでわざと茂木君から遠去かつてゐました。蹴球部の爲にも、茂木君の爲にも一番良い事だと思はれるに茂木君が蹴球部に再出發されてゐる事を知り快哉を叫びました。蹴球部の爲にも、茂木君の爲にも一報下されれば幸甚です。然るに茂木君が蹴球部に再出發されてゐる事を知り快哉を叫びました。蹴球部の爲にも、茂木君の爲にも一報下されれば幸甚です。過去の過去を咎める事は良くないと思ひます。蹴球部が良くて茂木君が偉いから再入部したのだと思ひます。どうか以前と異なる所無く、渾然一體となつてやつて下さい。お願ひします。

吉田に聞いた所では今春の成績は相當以上に香しいものだつたらしいですね。ほんとうによくやつてくれました。詳細な事が分つてゐませんので残念ですがベストメンパーを組まずして大敵慶應を破り、帝大に惜敗したさうで全く凄いと思ひます。此の勢を忘れないで合宿には更にヘビーを掛けて秋には榮冠を目指して下さい。シーズン前の鈴木主將の氣分も杞憂に終りさうなのは同慶に堪へません。夏季休暇の三商大戦は秋のリーグ戦の土臺として決して氣を弛める事なく、精神的に技術的にガツチリと當つて下さい。其結果及春の詳細な戦績をお暇な時に何方でも御一報下されれば幸甚です。

チャンクは是非歸途に立寄つて下さい。其後の委細伺ひ度く待ち受けてゐますから。夏季合宿は何處でやるか未だ決まりませんか、合宿に参加する事が目下の小生の最大の楽しみなのです。

では鈴木君の統率の下、折下君のホイッスル、松岡君の技術的精神的參謀本部、片山君のハリカリ、シュート、統率、茂木君の女房的役割と總てが十分に自己の力を出して而かも一絲亂れぬ様蹴球部發展の爲に御盡力あらん事をお願い致します。草々

追伸

本日部報頂きました。春の涙ぐまじき御精進有難く御禮申上ます。宿敵、慶應を破られた其時の凄愴味は想像以上のものであつた事と思ひます。

尙合宿の場所及日取確に知りました。待遠しく思ひます。

昭和十六年七月六日

その五

後藤虎雄

拜復

御手紙誠に嬉しく拜見しました。

すつかり御無沙汰して居て申譯無いと思ひますが、何れ、上京して諸君にお目にかゝれること、存じ失禮して居りました。扱、先日は對帝大戦に實に堂々たる戦ひ振りを示して見事に宿敵を一蹴して呉れて誠に有難う。心から御目出度うと祝ふと共に、早野君や貴君を始めとして全部員の眞摯なる精進を感謝します。當日は、數日前より不覺にも風邪を引き込み、應援には行けぬと自らに言ひ聞かせて居りましたが、春からの諸君の努力を思ひ、戦前、長瀬、荒井兩先輩の墓前に奮闘を誓ひ、又戦線に在る先輩を偲びつゝ、戦に臨む部員の心を思ひ、矢も楯もなく競技場に参つた次第で、ゆつくり喜びを共にする暇もなく歸宅致して小生も心残りを感じて居ります。

久し振りで見る部員の元氣一杯の姿、九十分間を倒れて後己むの氣魄で立派に戦つて呉れた部員の姿を拜見して、如何に深い感激を與へられたか。御想像願ひます。

此の精神力が全部員の平生の眞摯なる努力に依つて培はれたものであることを信する小生は、唯胸の詰まるを覺えた次第です。

又、最近、時局の進展と共に學生のスポーツが眞剣に論議され、殊にその心構への眞剣さが問題となつて居る様ですが、吾

々商大蹴球部に籍を置いたものには、むしろその遅きを笑ひ度い氣持であり、その意味に於ても、諸君の態度がスポーツの文
化的意義を明示して呉れたものと信じ快心の至りと考へます。

滿洲に居る岩崎にも翌朝の各紙のスポーツ欄を同封して、試合の様子、部員諸君の姿など、知らせてやりましたが、恐らく
彼も喜び勇んで居ること、思ひます。

又、北支の神野先輩より便りあり、九日に、快勝の報を手にして、胸が詰まつたと申して來られました。恐らく諸先輩、全
てが感激のこと、思ひます。

幸先の良い第一歩を踏み出した今後の心構へに就いても、充分考へて居られること、思ひますが、早野君や貴君等幹部の御
骨折を切にお願ひ致します。

豫科の試験中も國立に合宿の由、一層その團結力の増強を思ひ心強く存じます。次の對慶大戰は豫科生の試験後のこととて
幾分の不利もあることでせうが、奮闘を祈つてゐます。

御同封の入場券、誠に有難く頂きました。御蔭で小生もすつかり元氣になりましたから、十九日には應援にも參れるし、ゆ
つくり、お話も出来ること、楽しみにして居ます。

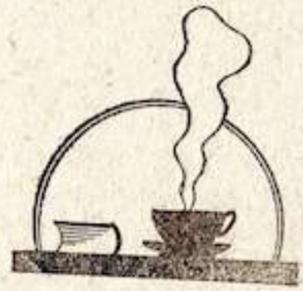
御無沙汰してゐるため、旭川の御見舞ひの御禮も申上げず恐縮して居ますが、あの節はどうも有難う。時々北海道の生活を
思ひ出して居ります。

では、朝夕の秋冷一入なる昨今、呉々も御自愛の程を祈つて居ります。

詳しくはお會ひの節。
諸兄によろしく。

昭和十五年十月十七日

折 下 兄



部員感想

蹴球する事

豫三 太田賢三

如何なる時にも、深い反省を以て自らを鞭打つて生活して
るのでなかつたならば、蹴球をする事も何の意味もない事
になつてしまふ。此の様な時代には又毎日球を蹴つてゐられ
る事自身非常に有り難い事なのである。然し、時代の波が如
何に高く荒れ狂ふ時にも、我々は自らの生活を勵む事を怠つ
てはならない。蹴球部を心の一つ古郷とする我々の生き方に
は何等變るべき事はない筈である。

此の事は、特に一年の人々に言へる事であるが、蹴球部の

生活がグラウンドだけのものではないといふ事は上級の人達か
ら、幾度となく聞かされて來た事と思ふ。蹴球部の生活は常
に不斷の精進であるといひ、又斷へざる苦難の道であると言
はれるのも、此の深い反省の生活を言ふのであつて、その反
省は常に「蹴球する」事を通して行はれるのである。そして
我々の偉大なる先輩は、此の撓まざる蹴球一路の生活の中か
ら、何時の時代にも眞實なるものをそれらの姿で、我々の
前に示して呉れたのである。そしてそれらの先輩と雖も、時
に踴躍めきつゝも、斷へず自らに烈しい鞭を持つて、一步一
歩進んで行つた事を忘れてはならない。

我々も亦各自の道を自らに鞭つて辿つて行かねばならない
のである。

雑感

豫三 安田興三郎

サッカーを始めて二年半、漸くサッカーの面白さが判りかけて来た様だ。部に對する愛着の念も愈々深まり、定まつて来た。だが、自分の技術の進歩は何とまあ牛の歩みの如く遅々たるものである事よ。せめても少し肉でもつけばと思ふが之は體質であらうか。幾ら飯を食つても肥りさうもない。

天高く馬肥ゆる秋、秋と云へばさう「巴里祭」の懐しくなる時だ。或ひは「舞踏會の手帖」を思出すもよい。それは試合に引分けた後で飲むビールのほろ苦さを思はせる。だがそれはとも角今年、あゝ秋だと思はせる様な日にぶつつかつた事はない。今日も又雨、靴拂底の折柄、大事な靴を又濡らすのかと思ふと佗しい。

雨が降ると、惨めな豫科の春の試合を思出す。冷雨降りしきる中で、農大豫科に惨敗した事、ぼう／＼と草の生えた、

弘前は兵隊の街。時局柄あの小さい街は、すっかりカーキ色で溢れて居た。そして夜も晝も、さく／＼といふ兵隊の足音、それに伴ふ軍馬、砲車の音が、あちらから又こちらからとひびいて来る。その足音は時刻によつて、又天氣に依つて、人數によつて、それぞれ違つたひびきをもたらす。真夜中に、ふつと目をさました時、どこからともなく聞えて来るあの足音。

歩む人とそのもたらす音、更にそれを聞く第三者の心情。人間は、それが進歩であれ、退歩であれ、常に歩み續けてゐる。捻挫もすれば、負傷する事もある。第三者がその足音を何と聞かうと自分の信ずる道を歩む人は動じない。併し、歩む人とそのもたらす音、それとそれを聞く人の三者が完全な調和の中に保たれ、ば、その時大きな一步を踏み出す事が出来る。

その人の爲にも、又それが如何なる形であつても、その人の屬する生活環境自體の發展にも、かゝる調和が望ましいと思はれる。

併し、それにしても、他人の足音にまぎらはせられない

法政のグラウンドで泥水を浴び乍ら初めて勝つた試合、そして雨上りの滑る浦高のグラウンドで浦高に惨敗を喫した事など。そして雨は又しても降つて居る。「雨ぞ降る」を封切つた所爲でもあるまいに。

秋のリーグ第一戦、商大が帝大と引分けた。個人技的に明らかに劣つてゐた我が部が示したあの團結力あの精神力。その本科に遙かに劣る技術しかもつてゐない豫科の實狀を思ふ時、轉た静思し得ざるものがある。

雑感

豫三 鷺埜和夫

練習を済まして、下宿の自分の室に歸り、暫らくぼんやり寝轉ぶのが毎日の習慣になつてゐる。その時、その日一日の間に起つた事、感じた事等が鈍い速度で頭の中を廻り初める。そのぼんやりとした回想の底に、いつも同じ足音が流れてゐる。

で、しつかりと自分の足下を見つめて行かう。

毎晩々々生れ出る二ツ三ツの取りとめもない想ひの中から一ツを拾ひ上げて、至らぬながらも約束を果させていたどきました。

希望

豫三 古賀文之介

なま暖い土の感觸を楽しみ、麥生の伸を日毎に喜んだ嘗ての日を思ひ出しつゝ、再び黒褐色の上に還つた武蔵野の畠道を急ぐと、漸く崩れ落ちる秋陽の向ふに、春から夏にかけては淡い霞に視界を遮られた秩父の山々が、暮靄の中に紫の輪廓も美しく連なつてゐる。流水に芽生の木が影を映す時には浅春こそ武蔵野の若い素朴な姿を示すものだと思ひ、或は櫟林の紅葉が、將に落葉の刹那に達した時こそ、多彩なる秋に未だ汚れぬ武蔵野の持つ哀愁を感ずると言ふならば、冬枯の梢に半弦の月を靜に見守る時、私は何を想ふのであらうか。

そして武蔵野に於ては最後の斯る季を間もなく迎へる私は、三度目の冬が、も少し遅くやつて來ればよいと心密かに念ずる收穫の唄を愉しく歌ひ、來る春を指折り數へて待つた日は何時再び訪れるのであらうか。併し、毎日毎日のかそけくも果敢ない收穫を貧しい心の倉に取り入れようとの願が、焦燥から出たものだと思へるのは止めよう。新春の訪れを告げる騒音が稚き心と、努力の至らざるが故に、悲痛に聞える私ではあるが、雪解の日には、生々した希望を抱く若さだけはある事を信じて、激しい世なるが故に清純に命かけて生きようと希ふ。

——遍歴中に死する事で吾々は満足する——デイルタイ。

ある 陥穽

豫二 西内 碩男

之は自己の生活のグラウンドの外側だけを丁寧に地ならして、それにのみ徒に疲れてゐる者の言葉である。

活の本質に導いて行つてくれるのではないかと思ふ。中味といふものは、そのものだけでは形がないかも知れない。形といふものは外側が與へるものであるかも知れない。が欲しいのは中味である。中味は外側によつて規制されるのではなくて、中味が外側を作るのではないかと考へる。

だが考へたくないと思つてゐるくせに、一生懸命考へて、それが少しも核心に行けない空轉であることを悲しむ。そして、もやくとした自分の書いた言葉が厭である。書くことによつて説明しなくとも、もつと別の形で自分といふものが表現されてゐる筈だからである。併しかう考へることは何か欺瞞があり、ある困難を回避したどうにもならないふてくしい傲慢もあるかも知れない。

とにかくそんな氣持は何處から來るかと言へば、自分といふものの活動が遮り止められてゐるからである。自分自身の中に窒息してつて、自分だけの世界の濁つた空氣が、倦怠と中絶とを起すのである。

だらしないかも知れない。併し自分を失つて了つたとは思はない。それも虚言だと云ふなら、少くとも自分を追求して

自分の生活といふものはどのやうに考へたらいいのだらう。それは外から與へられたものであらうか。又は只全く自分自身のものだけなのであらうか。或ひは又何處からか與へられた世界中での自分一人の生活の生活なのであらうか。でなければそのやうな世界でその世界の力に引廻されることであらうか。さうでもないとしたら、一體どういふことになるのか。

こんなことを考へるのは、全くうんざりする。之を自分に解明する程頭が働かない。又それが分る程その生活といふものを經驗してゐないぜいかも知れない。それはとにかくとして、その生活云々といふことについては、何も考へたくない。そんなことを考へるのは多少とも自己辯解的なものであり、懷疑であるからには信念の薄弱なものであり、結局は又自己の内應に對する暗い不安な恐怖である。それには夫々の意味や、原因や、又それについての種々な考へ方があるかも知れないが、それ等のことは要するに生活の外廓であり、自分の生活の中に一步も踏み込んでゐないのであると思はれる。魂の中に感じ、身體の中に湧き上るある分らない力が生

ゐるとは云へるだらう。それは限りない切望を虚しく空を掴んだ兩腕に痛々しく表現し、絶望的な憧れで身もだへする人體と、その足は大地にしがみつき、その重い胴體は飛び上ることも出來ず泥土の中に蹲る馬とのケンタウルの姿であらうか。

だが併しそんなものを考へる自分を憎む。一方では——實はそれに自分が頼つてゐるのだから、本當はと云つた方がよい——自分の小さなものであるかも知れないが、自分自身を動かしてゐる力を感じてゐるのだから。

それにしても餘りにも安々と自分のもつ陥穽の中に、落ちて了つた。陥穽なぞ有難さうに抱いてゐるものに呪ひあれ。

雑 感

豫二 松 浦 巖

俺達は浦高に完全に負けた。意氣で負け技で押され、見る

も悲惨な其の敗様は試合した者、應援の者皆均しく肝に銘じた所である。此は晉軍に練習云々等で片付けられる問題でなく、もつと深く廣く、吾々の生活態度を反省せねばならぬ問題であると思ふ。

吾々の日々の練習が唯單なる運動で終るなら何も辛い目をして蹴球をする事はないのである。毎日々を泥と汗とに塗れて球を追ひ走り蹴る事が吾々のより高次の人格生成へと努める——多く其が無意識的にせよ——其處に胸中深くより湧き出る喜びがあらねばならぬ、興味以上の歡喜があらねばならない。其の喜びのある所、部生活に熱と意氣とをわき立たす物である。而して其の歡喜を蹴球のみならず、吾等の今生活より溢れ出る物であらしめねばならない。運動場以外の生活に學問に又些細な行爲に、充實せる若人のたくましい意力をぶち込んで隙の無い眞剣な日々を送りたい。日々の全生活が眞面目に充實し、歡喜に溢れ、意欲に満ちた所に其の人の全人格は發露されるのである。

現代の青年は甘やかされ過ぎてゐる、吾々も其の一人である。吾々は自ら苦しみ更により多くの苦しみを求め、自己の

意志に依るのではなからうか。毎日の練習は絶對安易なる遊びではなく寧ろ一種の肉體的苦痛さへ伴ふ。然しグラントは身體を強健にするの場であり、精神修養の戰場であると考へる。此の戰場で戦ひ續けて行こうと思つてゐる。

感想

豫二 助川 實

月日の立つのは早いものと云ふが、全くその通りで、此の間サッカー部に入つて歡迎會をやつて貰つたと思はれるのもう二年も終りに近づいて了つた。その間を顧みてみると全く我ながらだらしなと思ふ。

部の爲に盡そう／＼と思ひながら未だその萬分の一も形として現はず事が出来ぬのは全く残念である。春浦高に負けて今や雪辱の時は迫つて來た。

今の氣持として、どうしても浦高をのすのだと云ふ事以外何もない。私は今は何も言ひたくない。たゞ浦高を目指して

深き強さを大にせねばならない。

蹴球部は幾多先人の苦難の汗と血で築き上げられた、吾等の先輩は苦しんだのである。吾々は其の良さを結晶を誇つてもよい。だが其の住み良さに安んじてはならない。吾々も其の苦を背負ひ、自ら汗を流して其の良さを受継ぎ、育てるだけの事をせねばならぬ。

グラントのみならず全生活に於ける吾人の眞面目さ、其が今度の浦高戦を期として烈しく反省されて然るべきではないだらうか。

弱き者

豫二 高橋 三善

意志の薄弱、常に自分を省りみて感ずるのは此の言葉である。人生は苦闘の連続であり、決して安易なる生活ではないと、ともすれば起り易い弱き心に答打つてゐる。エヂソンがあの大發明を成し得たのも總ての困難を戦ひぬいた強固なる

頭張るばかりである。

その頭張りの實を結ぶ時に始めて私の今の胸の中にあるもやく／＼した感情を吐き出して言葉とする事が出来るだらう。今は何も言ひたくない。だゞ精進あるのみだ。

感想

豫二 金原 實

私が部生活を省みて、甚だ慚愧の念に耐へないのは、今迄部生活に於て屢々束縛を感じ、又現在も感ずると言ふ事であります。例へば、本が讀めないとか、文化講演が聴けないとか、旅行に参加出来ないとか等々です。

此は今迄、私の、部に對する不平の一つであつたのです。が、之等を省みて、私は、今迄愛部心とでも言ふべき、蹴球部に、蹴球する事に總てを打ち込む氣持が足りなかつた事を恥ぢざるを得ないのです。

近頃、三浦先生の修身の御講義の中で、時々深く思ひ當る

事があります。即ち、先生の言はれる「どこ迄も自己中心の思想の中に於てどこ迄も自己を生しつつ、然も、此の自己を生す事に依つて全體と融合し、全體と統一を持つ」事に吾々の部生活の目標があるのではないかと思ひます。つまり束縛を感じるの、未だ自己に徹し切らないからであり、愛部心が足りない結果であると思ひます。蹴球に依つて、自己の人格を陶冶せんとする熱意が足りないからだと思ひます。本當に部に打込んで只管蹴球道に進進したら、我々の周囲の束縛も、束縛と感じなくなるでせう。そして蹴球する事に生甲斐を感じ、蹴球する事に依つて自己を磨く結果になるでせう。私は上述の様な氣持で眞摯な部生活を送りたいと思つて居ます。

一 風土記

豫二 荒川 正三郎

「君の家は何處だい」と聞かれる事がよくある、「深川つ

て何處だい」には一寸憤慨する、地方人が知らないのは、まだ許せるにしても東京にゐて深川を知らない人がゐるのには弱る、又知つてゐる人でも誤解してゐる人が多い、豊田正子の「綴方教室」で紹介された貧民窟をその典型としてゐる。はゞかり乍ら僕の住んでゐる深川は、深川でも普通の深川とは違ふんだ、木場と云へば昔から有名ぢやないかと言ふ所を紹介したい。

国立、國分寺を通る省線は全部東京行きである。商大生は歸りには必ず之に乗るのに東京迄行く者は殆んどないから悲しくなる、東京驛で下りて電車で東へ行けば日本橋である。もつと行けば永代橋で隅田川を渡れば深川だ、それをもつと行けば木場がある。人口何千だか何萬だか知らないがとにかく國分寺より大きい事は確かだ。全町内材木屋である。他の如何なる商店も入るを許さない町である。廣い街路に青々と街路樹が並んでゐる。その横を材木を置く納屋が並んでゐる。實に壯觀である。町街を歩くと東京にゐて新鮮な木の香を嗅ぐ事が出来る。晝は材木の荷揚げ、積み込みで活氣がある。夜は夜で納屋ばかりだから人家の灯が少く、木場の情緒があ

る。

此處に材木商を営む人は大抵相當な金持ちである。ある材木の賣買の儲は驚く程大きいから。然しこの金持ちも一世代前には大抵そこらで材木をかついでゐた小僧だつたのだ。木場の旦那は一代に成り、一代に亡びる。その子にして材木商をつぐ者は少ない。榮枯盛衰が甚しい。此の木場に存在を許されてゐる者に郵便局があり、そこが我が親爺のゐる所なのである。彼は裸一貫にして四國を出で材木商の小僧となり營々今日あるを築いて來た。然るに急に材木商をやめ郵便局となる、その理由は知らない。

木場は何時頃に始つたか知らないが、徳川時代からあつた事は分る。然るに今事變によつてその面目を一變せんとしてゐる。木材の不足から値が騰つた、需要者は激増した、すると木場の旦那は材木を納屋にしまつて知らん顔してゐた。値は益々騰つた。それが分つて木場の旦那連は警察署へひつばられて何日も何日も泊められ、懲役何年だ、罰金何千圓だと騒いでゐる。それでも罰金より儲が大きいからやまらない。それで政府は木材統制會社を建て、木材の配給を一手にやらう

と着々準備をしてゐる。さうなつた日には木場の旦那はその社員で月給幾何といふサラリーマンになつてしまふ。變れば變るものである。

無題

豫一 川端 良三

生來文筆の道拙く、筆をとる事が臆苦で締切當日なる今日やつと筆をとつたもの、何を事いて良いか分りません。

唯、現在感じてゐるまゝ、一寸許り。………實際僕は意氣地がない積極性がない、あまりにも自分に甘すぎる、兎に角、入部以來半年といふ間何をして來たのか自分にはさつぱり分りません、自責する許りです。

併し、幸に部生活にもなれ、商大蹴球部なるものが分り、親しさを感ずる様になりました。

今後の精進ある耳です。

蹴球部の一日

豫一 外池 隆

地をかんで突撃して来る、ボール、見當をつけて、ボールと足を振ると、高くすいすいと、その速さに似合はないゆつたりとした調子で、下をぐるりと見渡すやうに廻轉し乍ら、又眼の前に落ちて来る。「なーんだ。」と、不意に何とも云へぬ感情がこみ上げて来る。それは自嘲か不満か、はにかみか、とも角、人間の本能だらう。それは笑つてるやうに、顔の筋肉を引きつらせる。「後後」誰かに怒鳴られて、氣を取り直して、力一杯又足を振る。足下から、切れたボールが、躍る様に、頭をふりく、飛んでもない方へ轉つて行く。「ドンマイ」一寸なぐさめられて、一寸しよけて、半分棄て鉢のやうな氣を取り直して、今度こそはと眼を据える。それを冷笑するやうに、横の方から、ミス、キックの球がいきなり大きく押しつぶされた隋圓のやうに、私の視界に入つて來

とでも口を利く者が居るなど、獨りおかしくなる時がある。

感想

豫一 佐藤 裕之

浦高戦を明後日にひかへて、病床に就かざるを得なかつた時の氣持は今だに忘れる事が出来ない。

その時以來、體の不調の爲、全くグラウンドから離れてしまつてゐる自分にとつては、あの時の事を思ひ出すのは、自分の苦い失敗や罪を思ひ出す如く感ぜられて、苦痛に耐え無い。

部員の方が元氣で、グラウンドを走り廻つてゐるのを見る毎に、一種の美望と自己の不甲斐なさを感じ、只管體の恢復を計り、早くグラウンドに出て球を蹴り度いと思つてゐる。

無題

豫一 奥村 一郎

る。

たまにするく直正面から来る球を普通につまりうまく、あたつてごく普通の弧を書いて飛んで行く、それを惚々見送つて居て、「ナイス、シュート」なんて云はれると、大急ぎで引き返して、「あんなのなんでもない」と見せようと、つまり喜びを隠さうとして、何時でもあれ位蹴られる、と云ふ事を見せる爲に、次のボールを物色する。

× × × × ×

バックが入つて練習して居る。空は青く、その青さにべつたりと貼りついて居るやうな薄い雲。黄葉した櫟林の遠景の後から、落日の金色が、ぱつと眼を射て、黒土を薄赤く染める。綺麗だなと、名畫でも觀賞するやうな眼付をするでも現実は美ばかりでは成り立たず、崇高は滑稽と紙一重とか。何時の間にかぶよは二三匹脚にくつついて、ぶつつり齒を立てる。ちよつ、ぶよが黒いあかのやうになる程叩きつぶして、その脚の痛さにふと眼を元に戻す。バックが汗一杯に蹴つて居る。自責の念に驅られて、それを取り戻す様に眼を見張る。

この單純さがよく小生の叱られる所である。私はよく、僕

僕は元來蹴球が好きであり、古賀さんの勧誘やあれやこれやでこの部へ入つたが眞實好い事をしたと思ふ。練習は飽く迄眞劍、部内は和氣霽霽合宿中に於ても我部が最も規律正しい。

合宿中、二階堂先輩に先人の苦闘を伺つたが、我々は深く感ずる處があつた。

此の頃の練習は實に楽しい。氣候も丁度好い上身體の調子も上々なので練習の早く終つた日などは物足りなく、ボールを蹴らぬ日は飯が不味い。一日の練習を終へて風呂から上つて食卓に着く。その時は親の仇でも赦してやり度くなる。

部に入つて唯一の惱は好きな徒歩遠足が練習の爲シーズン中は少しも出来ぬことで、リュックが夜鳴きして困るが、この夏には郷里石川に歸り附近の小山に登つたり日本三名山の一たる越中の立山に登り山頂の景觀を擅にする等、遠足のやり溜をやつて置いた。

願れば部に入り手に取るやうにキックをへられ練習を始めた時から、最早半年は経つて終つた。もう半年もすれば順調に行く限り二年生となる。浮々としては居られぬと思ふ。

蹴球

豫一 永倉 眞平

—蹴球つて一體どんなの？

—球を蹴る事さ。

—何で蹴るの？

—足で蹴るのさ。いや又頭で蹴るのさ。

—頭で蹴るつて痛いでせうね？

—いや間違へた。足や頭で蹴る事なんだが、身體全體で以

て、全精神を打ち込んで蹴るのさ、

—蹴球つて一度も見た事ないのだけど、どんなスポーツなの？

—廿二人の男が、九十分間グラウンドで火花を闘はず壯敢なものさ。ドリブル。ドツチ!! タツクル!!! シュート!!! ゴールイン!! てなものだ。

—何だかはつきりしないわ。

—百聞は一見に如かず。今度の蹴球祭を見れば分るよ。我々

々が眞摯敢闘若い血潮をグラウンド一杯にブチ撒いて、蹴球して

る姿を見せたいね。蹴球は團體競技だから勿論、超個人的で一致團結を必要とするからね。個人の我儘は許され

ない。普通の練習に於けるチームワークこそ大切だね。勝利への近道は何と云つても練習々々だからね。猛練習をやるよ。

—そんなに練習々々で、それで身體が一體持つの？

—勿論身體の弱い人は持たないね。然しそんな人は運動しないからね。運動する人はやはり常人より二倍も三倍も

の體力を必要とするからね。無理する事もあるね。肉體の不足は精神で屢々補足して

るんだ。然し肉體と精神の矛盾は常に存在してゐるよ。兩者の歩調が揃つてれば申し分な

しただけど。どちらかが多少なりとも狂つては駄目だね。然しそれを承知してても、我々は崇高な目的へと絶えざる努力をつづけてゆくのさ。ここにスポーツする者の楽しみと同時に無理があるのさ。

—傍から見てもハラ／＼するでせうね？

—そりやさうかも知れない。けれど我々はもう無我夢中だよ。自分で此以上出せないといふ極點迄頭張るんだよ。

—實際やつてる者には見せかけはない、況や見てくれは絶對にないよ。文字通り眞摯敢闘さ。

—何だかはつきりしない。

—それでいゝよ。いくら口で云つたつて分らないよ。兎に角蹴球を見れば分つてもらへるよ。是非見るんだね。

—兄妹の問答—

附記 九月十四日妹死去の際、部員御一同の御厚志に對し誌上を借りて茲に衷心より御禮を申し上げます。

所感

豫一 野尻 七郎

中學時代には何も運動をやりませんでした。商大に入つて何か眞當に運動部らしい部に入りたいと思つてゐました。

蹴球部は非常に練習が激しいと聞かされてゐたので、自分の

やうなものでもついてゆけるたらうかと云ふ、不安と又未知の部生活に對する憧憬で胸をふくらませて入りました。

そして今まで半年の間蹴球部の中に生活し、専心ボールを蹴つて來ましたが今では眞當に商大蹴球部に居ることに喜びと誘ひを感じてゐます。始めてボールに向つてボールを蹴

つた事や、惨敗に終つた春の浦高戦、苦しかった夏の合宿などしみ／＼思ひだされます。夏の合宿を始めて二、三日経つて今までのんびりして來た身に急に猛練習を始めたので、身體が完全にへばり足が痛くなり動くのさへ嫌になつて、これ

で今後の練習を続けることが出来るだらうかと思つたが、練習が始まりランニングが始まると始めはつらいが少しづつと

平氣で駆け廻れるのには實際驚き人間の身體はいざとなれば結構動くものだと思います。ボールに全精神を打ち込んで蹴つてチャストミートに當つた時の快音は實際胸がすーつと

します。

然し今振り返つて見て自分は眞當に、蹴球部の中に融け込んで徹底した練習をしたであらうか。まだ／＼自分の練習は

甘いと云ふ自責の念に打たれます。

商大蹴球部の中堅であり原動力たる豫科の不振が叫ばれる折から自分をもつとく、頑張らうもつとく、ボールを蹴らう。

無題

豫二 加藤 春樹

中學在學中初めて蹴球に接して以來、非常な興味を覺えて、試合には毎回應援に出掛けたし、又遊び半分にやつて見たが身體の虚弱の爲に専門にやるやうになるとは思はなかつた。商大に入つて志望の班を書かされた時につひ、蹴球班を選んだ爲、とう／＼やることになつてしまつた。

其の上ゴールキーパーで試合に出るとは思もよらなかつた。さて始めて見ると今迄考へてゐた他のポジションとは全然異なるし元來運動神経の發達してゐない僕の事故辛くて厭になる事が再三であつた。練習が辛いとは感じないが試合で負けた時など皆に濟まなくて辭めやうと思つたり練習がうまくいかなかつたり、従つて他のポジションが羨ましくなつた

り總て悲觀的であつた。もし蹴球が好きでなかつたなら、恐らく部を出てゐたかも知れない。相當キーパーのプレイに明るくなつて來た今でもともすれば、其の様な感情に落込む時が多い。朗かに練習する事が出来るやうに早くなれば良いと今は只其だけを目標にしてゐる。



戦果

昭和十五年年度戦績

○四月廿五日 (日) 對文理大戦 (練習試合)

於、小平 二時

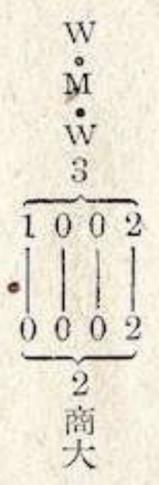
大島	澤藤	井浦村	部村永藤原
飯佐	安松中	高小松近榊	
13	3	3	

大川	荒川	木井上	木井山岡田
居川	水島	鈴早淵	青金片松吉
3	2	3	

春の合宿以來始めての練習試合も未だ調子揃はず引分く

○四月廿九日 對早大W・M・W戦 (綜合選手権關東豫選)

於青山師範、商大先蹴



大商	居川	荒川	木野上	木井山岡田
青金片松吉				
18	3	1	6	

前半二分早くも金井のクリーンシュートにより一先取するも十一分高橋のロングシュートはGKの手をかすめて入り續いて十七分CKより川本のシュートなり逆にリードさるも廿三分敵バックのミスに乗じて片山のフリーシュートにより同

點にす後半兩軍動き鈍く延長戦となり、後半ゴール前の混戦から遂に一點を許し惜敗す。

○五月十一日(土) 豫科對東京高校戦(練習試合)
於東高

商大 1-0-0 東高

高不破	山平	川中木	野田	井岡原
東小紀	並田	青	矢吉	長藤上
G K	F B	H B	F W	G K
CK	FK			
11	2	5		

○五月十七日(金) 對帝大戰(練習試合)
於帝大商大先蹴

帝大 3-0-0 商大

帝大	濱野	田部	石山馬	池木野間谷
原長	力横有	菊直	天笹大	
8	2	3	10	

メンバー紛失す、スコアの上では大きな開きを示したが豫科は元氣一杯やつてくれた、併し後半の三點は最後の三四分である氣分のゆるみも見られたかも知れないが、全く技術の差と思はれる。

○六月四日(火) 豫科對慶應豫科(豫科リーグ最終戦)

商大 1-1-3 慶應

メンバー紛失

前半風下をとる、試合開始より商大常に攻められバックの出足アタックも悪く遇々決定的シュートに見舞はるも幸ひ決らず、十五分一點先取され、二十分直ちに青木右に迂回しセンターリングするを瀬藤快める、その後商大振はずシュート及ゴール前混戦より更に二點を加へらる。後半、數分後一點を加へられるもその後バック良く動き良抑へるもホワード亂パスで決定的チャンスなく結局四——に敗退す。

○六月十七日 豫科對浦高(第二十三回定期戦) 於浦高
商大 1-1-1 浦高

商大	居川	荒水	鈴木	早淵	吉金	片松	清水
G K	F B	H B	F W	G K	CK	FK	Shoot
8	3	6	4	Shoot			

本科のみの編成チームで對戦するも結局一點も突込み得ず
○五月廿一日(火) 豫科對法政豫科(豫科リーグ第一戦)
於、小平

商大 3-1-0 法政

法政	吉田	森本	山野	田部	井野賀
横矢	盧	增阿	櫻熊志		
G K	F B	H B	F W	G K	CK
FK					
18	3	4	0		

豫科軍必勝の意氣凄く殆ど相手にせず前半全部瀬藤きめ一方的に試合を進めて勝つ

○五月三十日(木) 豫科對早高戦(豫科リーグ第二戦)
於、小平

商大 0-0-2 早高

記録等紛失不明

○九月廿九日 商大對慶應(練習マッチ) 於日吉

慶應	津田	川崎	塚原	中山	崎邊	井島志
石大	大	笠田	内	篠渡	室高	岐
14	4	2				

商大	吉澤	荒川	浦	木野	上	岡井	山屋	水
G K	F B	H B	F W	G K	CK	FK		
15	3	1						

商大 0-1-2 慶應

經過記録紛失の爲不明

○同日 對慶應二軍(練習マッチ) 於日吉

商大	居川	澤木	田尾	賀	田	藤木	本
宮村	太堀	古	吉安	瀬	青山		
20	0	1					

經過記録紛失の爲不明

○十月六日 對帝大戰(リーグ第一戦) 於神宮

帝大	濱野	長田	石山	馬	池木	野間	谷
力横	有	菊直	種	笹大			
5	12	2	10				

大澤	G	K	川浦	F	B	木野上	H	B	岡井山屋水	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	1	1	荒松	F	B	鈴早淵	H	B	松金片土清	F	W	26	5	5	3
帝大	0	0													

前半二八分清水のセンターリングを片山左へ流し長谷部がGKにバックパスするも逆モーションとなつてそのまゝゴールインその後一方的に壓されたが全員捨身のタックルに防ぎ宿敵帝を敗る

○十月十九日 對慶應(リーグ第二戦) 於神宮

慶應	G	K	石加藤	F	B	谷中山	H	B	崎邊井島宮	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	0	1	荒松	F	B	木野上	H	B	田井山岡水	F	W	11	4	6	1
慶應	1	1													

商大真中を割つて兩翼へ廻し濺刺と攻める、前半二十一

ハタキ出す所を裴シュートして一點を返されるがそのまま押切る。

○十一月十日 對文理大(リーグ第四戦) 於、東伏見

文理大	G	K	藤藤	F	B	村崎和	H	B	永林原藤部	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	1	1	川浦	F	B	木野上	H	B	田井山岡水	F	W	17	4	4	12
文理大	1	3													

前半五分清水のセンターリングを吉田ヘッドで決め幸先よいスタートもゴール前にあげて突込むダッシュは激しく遂に九分、三六分、四四分とリードされ後半、廿三分高部のロビッツを松永シュートしその頃から活氣を取もどした商大は早野を攻撃に加へ、三六分土屋センターリングするのを片山ヘッドで決めるも時既におそく完敗す、結局敵のキック・アンドラッシュに捲込まれた形なり。

分高島篠崎と渡りセンターリングを渡邊ヘッドで一點先取さるも二十五分ゴール前で吉田流し片山田中と重なつてゴール前に出松岡すかさずクリンシュートす、後半壓せられるも閉戦直前までよく防ぎ引分かと思はれる中室井のパスを篠崎逆ポストへ弓なりに走つてヒツカケたシュートが決り續いて二宮極め無念長蛇を逸す。

○十月廿七日 對早大戦(リーグ第三戦) 於帝大

早大	G	K	石川	F	B	田岡島	H	B	村井橋納	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	1	1	荒松	F	B	木野上	H	B	田井山岡水	F	W	20	4	8	6
早大	1	0													

九十分間押され續けたが先づ前半30分逆襲からゴール右前の混戦で早大バックが右へよりすぎ左へ廻してノーマークの清水決め、後半一七分吉田のセンターリングを松岡決めて二一〇とリード、30分右コーナキックをGK

○十一月十七日 對明大戦(リーグ最終戦) 於、帝大

明治	G	K	林野	F	B	原中島	H	B	積坂内木林	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	1	3	川浦	F	B	木野上	H	B	本井山岡水	F	W	7	7	1	
明治	0	0													

明治は何れにしても二部落ちと決した後の試合で全く戦意なく、前半三分金井十七分清水からの大きな球を山本突込み、四四分片山のロングシュートなり、後半、二十六分松岡山本片山と渡り片山ストップしてシュート決り、結局四一〇と大勝し、此處に十五年度リーグ戦を終る。

○十一月三十日 豫科對東京高校(練習試合) 於、東高

東高	G	K	諏訪	F	B	田中木	H	B	田林井平山	F	W	GK	CK	FK	Shoot
商大	1	3	荒松	F	B	木野上	H	B	山金片松清	F	W	8	4	2	14
東高	1	3													

豫科 内田 助古 梃田 藤太遠 田屋藤木橋 安土瀬青高 19 3 2 5

商大 0 1 1 1 東高

○十二月七日 豫科對浦和高校（第二十四回定期戦）
於、小平

浦和 山口 島藤 納瀬岡 水田本川本 10 3 1 9
高 山 小佐 加奥政 清川河山岡 8 1 0 10

豫科 内田 太賀 梃浦藤 田屋瀬木橋 8 1 0 10
科 内 太 梃 田 安 8 1 0 10
大 2 1 2 1 浦高

○十二月廿一日 對一高（練習試合）於、小平
記録紛失の爲經過不明

一高 鈴木 尾井上 邊藤林 谷岡江原上 11 4 0 2
C K 鈴木 尾井上 邊藤林 谷岡江原上 11 4 0 2
F B 中大 渡加小 滋藤松田三 2 C K 11 4 0 2
H B 渡加小 滋藤松田三 0 F K 5 Shoot 2

大商大 池田 駒村 野田 村田安谷木 26 7 2
生松 佐水榊 野米大滋竹 26 7 2

東商大 居川 澤木 鈴木野上 田井山岡本 12 8 1
宮村 鈴木野上 田井山岡本 12 8 1
山金片松山

東商大 4 1 1 0 大商大
大阪に戦意なく山本のセレターリングでもそのまゝ、ゴールインし四點を得る程で問題にならず、金井二點、片山三點を入れ、大勝す。之にて十五年度を終了せり。

昭和十六年度戦績

○五月十一日 豫科對專修科（豫科リーグ第一戦）於小平

專修 金本 山原 田本山 本岡原山 11 8 4 5
大西 德宮善 武松李金松
大 加藤 田壁 藤浦賀 川田川倉橋 19 2 6 7
商 加藤 田壁 藤浦賀 川田川倉橋 19 2 6 7
太鷲 遠松古 荒安助永高

商大 0 1 1 1 一高
大 居川 荒宮 鈴木堀 田田本岡山岡本水
商 居川 荒宮 鈴木堀 田田本岡山岡本水
山(吉)山(松)片(青)山(清)

敵は一部優勝チームなるも高校の如きに引分くとは残念なり商大は前後半ホワードを入替へる前半山田逆サイドのボールを突込みし得點のみ。

○十二月廿五日 對神戸商大（三商大リーグ）於、甲子園

神商大 櫻井 賀豊 田津井 井川崎澤島 21 2 5 7
千飯 西島藤 永賀鹽戸屋 21 2 5 7

東商大 吉澤 荒川 鈴木野尾 田井山岡水 13 3 3 19
荒村 鈴木野尾 田井山岡水 13 3 3 19
吉金片松清

東商大 1 2 1 2 神商大

前半強風下の爲押され氣味後半押しまくりチャンス多きも決らず結局引合く。

○十二月廿六日 對大阪商大（三商大リーグ）於東遊園地

商大 0 1 1 1 專修

今春豫科始めての試合、前半二〇分敵の立つに乗じて出足良く遂に安田飛込んで一點先取す後半敵一點を返してから色めき立ち、立なほる暇もなく更に一點を加へらる今一步頭張がほしかつた。

○五月十七日 豫科對農大豫科（リーグ第二戦）於、小平

農大 大城 金山 澤李太 藤井橋元馬 4 2 1 11
金高 澤李太 藤井橋元馬 4 2 1 11
佐酒大岩相

商大 加藤 田壁 川浦賀 藤田藤原橋 12 3 1 7
太鷲 荒松古 佐安遠金高 12 3 1 7

商大 0 1 1 1 農大

豪雨中寒氣はげし、農大左側より持込み中央ペナルティライン附近に點々する球を李右にドリブル、シュートはゴール左を割る、加藤ブラインドを衝かれたるが如し遠藤安田のシュートあるもバレーに當りG K正面をつく中P Kをとり松浦蹴るも右ポストに當り轉々するを遠藤すか

さす決める、後半李チャンスを作り五分真中をわり一點廿分再び真中より一點次いでロングシュート、G K ハンプルスルを突込んで一點、計四——一とはなされて敗る。

○五月十八日 對文理大(練習マツチ)於、文理大

文理大	島田澤	林永	村藤原村藤	10	5	0	14
	吉飯	小松窪	北近柳中伊				
商大	居川	島澤	鈴木藤	14	6	0	17
	水宮	鈴木瀨	青土片松山				
商大	文理						
	0 1 0 0						

今年度最初の對抗試合勝つた。

○五月廿五日 豫科對法政豫科(豫科リーグ第二戦)於、元住吉

法政	塚原上	嘉野	芝田山部費	15	4	3	1
	中三	調矢野	朝増横阿志				
商大	居川	島澤	鈴木藤	6	4	0	11
	水宮	鈴木瀨	青土片松折				
商大	文理						
	0 1 0 0						

商大	加藤	田埜	川浦原	藤田藤賀橋	5	2	2	7
	太鷲	荒松金	佐安遠古高					
商大	法政							
	2 1 0 0							

農大戦後豫科の故障者多く一時暗膽たる思をするも完全に立なほつた豫科は夜來の豪雨後のブルの様なグラウンドでよく敵を壓し、高橋のシュート松浦のロングシュート決らず度々のチャンスもフオワードの突込みなく遂にハーフタイム寸前松浦のシュートをC K 投げんとするに佐藤チャージして突込後後半攻め續ける中佐藤シュート又高橋のシュート決まり三——〇とひらいてタイムアップ

○五月三十一日 對文理大(練習マツチ)於、小平

文理大	島田澤	林永	村井藤田中部	12	1	2	2
	吉飯	小松窪	中安近千田(高)				
商大	居川	島澤	鈴木藤	6	4	0	11
	水宮	鈴木瀨	青土片松折				
商大	文理						
	0 1 0 0						

商大 1 1 2 0 文理

前半よく動くもゴール前の鋭さなく、後半は敵にリードされた形で再び迎へた敵と遂に引合く。

○六月二日 豫科對明大豫科(豫科リーグ最終戦)於、小平

明大	中川山	宅原田	林坂本泉鍋	11	3	1	6
	市森	三栗上	木黒山徳眞				
商大	加藤	野田	原浦賀	21	3	3	3
	鷲太	金松古	佐安遠永高				
商大	明大						
	1 1 2 0						

商大優勢裡に試合を進め二〇分頃高橋の大きなクロスボールを佐藤よくダツシュしてシュート一點先取す、その後動きが鈍り敵は一點を返す、後半疲勞の爲か商大動かす幸ひ敵のシュートは決らず二十五分頃から商大猛然反撃に出てゴール前に壓しつゞけるもダツシュなく決らずタイムアップ寸前高橋のコーナーキックは良いボールで

あつたが、僅かにダツシュなく終に引合ける。

○六月七日 對帝大(練習試合)於、東大

帝大	野田村	瀬山津	田馬谷島野	7	7	3	6
	原木	奥横川	種有大奥天				
商大	居川	太宮	鈴木藤	14	3	2	5
	田澤	鈴木瀨	青松片土永				
商大	帝大						
	1 0 2 1						

記録なく経過不明、帝大恐る、事なしと秋の勝利を誓ふ

○六月十一日 對慶應(練習マツチ)於、小平

慶應	家崎塚	原中山	池屋島田田	3	7	0	14
	大	笠田内	尾大高村濱				
商大	居川	塚澤	木浦藤	15	1	1	5
	藤宮	鈴木瀨	青松片永山				
商大	慶應						
	1 1 0 0						

雨上りで滑るグラウンド負傷者多く代りのものが出るが七

十分間元氣で動き通し、昭和二年十月五日以來始めて全慶應を破り得た。

○六月二十一日

豫科對浦高戰（第二十五回定期戰）於、浦高

浦高 橋尾藤 納井松 島崎本田本
高松佐 加村小 長山河石岡 10 3 3

G K F B H B F W G K K K
C F

大藤 田野 川浦賀 原田藤倉橋
商加 太鷲 助松古 金安遠永高 13 3 5

商大 00 32 浦高

兩軍共に浦高戰にふさはしいファイトが無かつたのかキツクオフ二分にして一點先取され氣分的に押されたのか相次いでゴールを陥され遂に完敗す。

之で昭和十六年春のシーズンを終了す。尙七月中旬三商大戰を行ふ豫定で神戸、大阪は上京したのであるが折柄皇軍佛印上陸の爲某方面より中止の進めがあつた爲、本年の三商大戰は中止と決す。
(以上編輯部)

名簿録

部長 佐藤 弘教授
科部長 岩田 巖教授

役員十六年度
主將 鈴木 英二 (本三)
委員長 折下 章 (本三)
會計委員長 山田 久 寧 (本二)
豫科主將 太田 賢三 (豫三)
豫科委員長 古賀 文之介 (豫三)

十七年度
主將 村木 杉太郎 (本三)
委員長 藤塚 亮策 (本三)
會計委員長 山田 久 寧 (本三)
豫科主將 松浦 巖 (豫三)

編輯部調査

豫科委員長 西内 碩男 (豫三)

先輩

右住所 昭十六年現在
中勤務先
左留守宅

大正十四年度卒業 進藤 靜太郎
兵庫縣武庫郡住吉村瀬川二丁目(電御影八二四)
大阪市東區高麗橋詰町三五進藤商店
大正十五年 松本 正雄
杉並區西高井戸一ノ一三九
京橋區銀座西二丁目實業ビル内松本法律事務所
(電 京橋六〇八六)

川村 通
世田谷區東玉川町二(電田園調布二八三五)

昭和二年

高橋朝次郎
鎌倉市材木座海濱ホテル構内
キリンビール株式会社(電京橋六一一)

明石毅

大阪市北區南扇町五
大阪ガス株式会社北營業所長(電南一八〇)

猪瀬辨一郎

杉並區馬橋一ノ三七(三浦方)
帝國鑛發東京本社

昭和三年

三宅弘方

仙臺市南町通一
日本油脂株式會社東北營業部仙臺市南町通二

四年

瀬社家力

小石川區小日向臺町一ノ六四
日本ピストリング株式會社

五年

渡邊甚吉

芝區白金三光町二七三
有隣生命保險株式會社

城島鎮雄

豐島區高松二丁目一七ノ五
豐島商會(電丸内五三二二)

伊藤健吉

大森區馬込東一ノ一〇八四

森綠

名古屋港區稻永新田字ヨ六七五
金城工業株式會社

近藤豐太郎

牛込區津久土町二

豐田達治

本郷區湯島三組町四〇

平松宣夫

津田弘精

住所不明
井物産

西川善一

昭和六年

住所不明
三井

昭和七年

世田谷區奧澤町二丁目一〇〇四
古河合名株式會社

橋本林三

世田谷區代田一ノ六五二
株式會社高田商會

吉村豐三

豐島區池袋一ノ五一四
三菱商事東京本店

二階堂謹司

豐島區池袋一ノ五一四
三菱商事東京本店

後藤博基

大連市山縣通一六五
滿洲特産專管公社大連支社

水島茂

Casilla 69-D Santiago Chile
三菱商事 % S. A. C. Mitsubishi-chile

神野光司

品川區五反田六ノ一九一
清一郎改メ

淺枝彦太郎

昭和十一年

昭和十年

昭和九年

昭和八年

赤坂市表町二ノ一、一

勝田一郎

西田嘉兵衛

小石川區高田老松町一七
片倉製糸

本郷區湯島天神町一ノ八六(電下谷八五六)
資生堂

清水貞治

住所不明
明治生命保險株式會社營業部

高橋重彌

丸內海上ビル新館旭石油株式會社

高橋啓一郎

滿洲國新京錦町二ノ一〇
滿洲炭鑛株式會社人事課

滿洲國海拉爾白濱部隊佐藤隊
朝鮮無煙炭株式會社
廣島市廣瀬元町二、三、一、一

田島輝重
世田谷區池尻町四三〇
東京機工業株式會社

角田昇
三菱商事東京本店
小石川區林町一六

森田昭之
北支派遣木村部隊氣付櫻井部隊町田部隊
三井鑛山三池支店
澁橋區諏訪町一九九

昭和十三年

枝村藤三郎
目黒區下目黒三ノ四九八

鈴木彰

北京內二區絨線胡同六六
日本鑛業北京出張所
赤坂區青山南町四ノ二二

大掛隆久

豐島區堀之内町三三
三菱商事東京本店機械輸出課

淺田英暉
臺灣高雄州屏東市屏東十一
臺灣製糖株式會社
京都市綾小路高倉西入ル澤田方

重見敏之
南洋群島ベラオ島コロール島南拓内
南洋拓殖株式會社

林田毅
兼崎縣島原町釣鐘丁店
長崎縣島原町釣鐘丁店

村井恒典
中支派遣園部々隊湯野川部隊經理部
三井物産東京本店
世田谷玉川奧澤二ノ番(電田園調布二九〇)

昭和十四年

後藤虎雄

平塚市本町三ノ七〇九
栃木縣日光町清瀧丹勢二原紫明寮
古河鑛業

三菱鑛業宮城縣栗原郡鷲澤村細倉鑛業所
小石川區久堅町七四

狩森正雄

府下吉祥寺五六七
牡丹江省東寧滿洲第九二九部隊中山隊
三菱商事本社人事課

昭和十六年四月

金井雄吾

神戸市灘區篠原町本町一ノ三二
三菱商事大阪支店

堀尾貞一
東部第七十七部隊
杉並區上荻窪一ノ三二(電荻窪四一、二二)
三井物産本店

荒川守之助

栃木縣宇都宮市大町三三(電宇都宮三三三)
三菱電氣名古屋工場

早野廣太郎

小石川區丸山町一一(電大塚七九三)
三井物産本店

吉田富彦

昭和十五年

岩崎寛貞

牡丹江省滿洲第九六四部隊
三菱商事名古屋一支店
中野區大和町一、一、三

小西正夫

中支
八道市二堂町二、一五店
尾道市二堂町二、一五店

米山大三

三菱商事本社船舶部
豐島區池袋五ノ二一〇

二階堂晴三

廣島縣大竹町五三、二、一、三
南支派遣波八一五檜森隊
三菱鑛業本社

池尾隆二

北支派遣井出部隊氣付櫻井部隊本部隊
王子製紙樺太豐原
千葉市神明町三五四

菅瀬十朗

神戸市灘區高羽楠丘一〇八

三井物産高船部

三菱電機神戸工場

杉並區高圓寺三ノ二一八

芝浦區電燈マツダ支社

青島市四方奉化路五號華北東輔新生寮

華北飯田町知久町二

高橋道太郎

小石川區指ヶ谷町二(電小石川三八二七)

鈴木英二

杉並區馬橋二ノ一七〇(中野二七七三)

片山光夫

大阪市此花區島屋町五七

本科三年(昭和十六年十二月)

住友市金原町九社

廣島市河原町

澁谷區榮通一ノ三五(澁谷三七四五)

折下章

杉並區清水町二〇〇

三井化學大牟田

千葉縣東葛郡野田町中ノ臺二二

山本孝次

杉並區荻窪二ノ二二八(電荻二〇二二)

山田久寧

府下三鷹町上連雀五一五

藤塚亮策

神田區五軒町四八(電下谷九六九一)

本科二年

居川達一

府下吉祥寺一八六江幡方

村木杉太郎

府下吉祥寺二七二九(電吉二二二二)

水島行

中野區宮園通五ノ四四豐山莊

宮澤力

麻布區材木町五六眞田寮

淵上明

八王寺市萬町一三八

青木育郎

澁谷區千駄谷一ノ五六二(電青山一八〇五)

豫科三年

瀬藤俊雄

世田谷區北澤四ノ五〇三(電松澤二五三九)

土屋五郎

浦和市高砂町四ノ一六五

太田賢三

小石川區指ヶ谷町一三七

白鳥義夫

杉並區阿佐谷四ノ四五

鷺埜和夫

杉並區馬橋二ノ一九〇(電能方)

奉天市大和區藤浪町一八

古賀文之介

世田谷區北澤四ノ四一

安田興三郎
大森區雪ヶ谷町八六八
(麻布中)

山地鴻

杉並區西荻窪二ノ五二
兵庫縣武庫郡御影町石屋字朝后五七三
(神戶中)

西内碩男

府下國立立ホテ
仙臺市南町通二一〇
(仙臺中)

松浦嚴

澁谷區代々木初臺町四七五(電四谷
(神戶中)

助川實

吉祥寺三一六八鈴木方
名古屋市東區元柳原町三ノ八ノ一
(神戶中)

内田清比佐

小平村小川新田一二五六德久方
兵庫縣武庫郡鳴尾村下川縁七ノ四五
(神戶中)

荒川正三郎

府下國立富士見通一水寮
深川木場四ノ二ノ一〇(深川五八三)
(府中)

高橋三善

北海道岩内郡御鉾内町六五
杉並區井荻二ノ三秋山方
(札幌中)

永倉眞平

静岡縣駿東郡長泉村下土狩
(八)

加藤春樹

大森區北千束町三九四
(八)

外池隆

神戶市灘區弓ノ木町二ノ六

(神戶一中)
西浦正吾
北海道野付牛六條西一丁
(函館中)
遠藤英一
新京祝町一丁目警察官舎二六號宇都宮方
愛知縣碧海郡大濱町上之切
(刈谷中)
佐藤裕之
目黒區中目黒四ノ一四七六
(四)中
野尻七郎
福島縣安達郡本宮町南町裡一〇〇
(安積中)
奥村一郎
品川區上大崎四ノ二二八
(二)中

物故先輩

大正十二年高商卒
昭和二年學部卒

川端良三
函館市仲濱町一九
(函館中)
淺野博三郎
岐阜市本莊出雲(三三五七)寮

兵藤世平

檜垣延樹

渡邊弘

惠藤勤一

酒井孝吉
栗山健二
長瀬東作
荒井文雄

十二 九 七 六 五

編輯後記

初めてする編輯を終つて高く集つた原稿をバラ／＼と繰つて見る。今年一年の部の姿は此の部誌を形成した。私には時移り人は去るの習は部誌にもあり／＼と表現されてゐる氣がする。諸兄試みに三號、四號邊りの部誌を見給へ。

例によつて原稿の集りが遅かつた。例年の事乍ら秋に發刊すべきものが且が明けて第九號を豫定する時になつても未だ出さない人がゐる、何度か編輯をことはらうかとも思つた。何も云ひたくない。たゞ先人の「部誌は蹴球部の鏡である。内容は我々の心である」といふ言葉を私自身に又その人達に示したい。

過去に於て特輯となつた部誌はすべて、部の不幸を顯した。今年は何事もなかつた。部誌の貧弱なのもすべて私の責任である。編輯上新機軸を出さうとしたが名案も浮ばぬ。エイツとばかりにすべて前號を踏襲した。(山田記)

昭和十七年四月二十七日 印刷
昭和十七年五月一日 發行

蹴球 第八號(非賣品)

編輯兼 發行人 山田久寧
東京府國立東京商科大学内

印刷所 日興舎印刷所
東京市本郷區金助町二九番地

發行所 東京商科大学ア式蹴球部

蹴球部 及 報

(改巻才二)

部誌第八號を御送り致します。昨年中に発行致すべく筆のものをすつかり延びくりに存り本日やつと御手許に差上げる運びに存りはまじら。之と申しますのも唯もう編輯者の怠慢と無能とのせいでありまして、且その上又御覽の通りのは貧弱極りなものと存り、その書は専ら編輯者の受ふべき所のものではす。深く御詫い申上げます。

さて、いよ。昔が蹴球部の生死を掛けるリーグ戦が開始されました。四月二十九日の天長節は第一試合、早稲田大学がありまして、此で最も意味ある早稲田を向ふに廻して三十余名の我等が倒早稲田、心勝の信念をもつて戦に臨みました。今此知れ早稲田撃破の報をお傳へ出来ることと、心かうのと比しと深い

感謝とを感ずるものであります。

商大 三二二早稲田

この文句を申し、勝利を捉むに長く培われて来た伝統の力には不足で、我は、國志と元氣を結成して、只一路優勝へ向つて、奮進します。第一試合は帝大です。早稲田に勝るとも、お宿敵強敵です。我は之から、勝利は緒の道は更に困難に満ちて、悔しいもの、只意氣と張り、必勝の信念のある所には、ずや傳統の加護があります。帝大が約二週間、猛練習を積まう予定です。

早大	川澤	雨	太田	屋	倉
船山	宮水	村	山	守	工
三宅	熊	田	杉	井	米
加納					
11 GK	18				
9 CK	6				
10 FK	10				

部誌が八号の住所録を訂正を甲上45号

昭和六年

花王石炭長瀬商會(高野先)

十年

二階堂護司

% Mitsunobu Shoji Kaisha Ltd

110 Baugmate Baugkeste,

十三年

角田昇

世支派遣乙が三三。一部隊分隊主計甲尉

十五年

小西正夫

中華民国泰縣太東橋東河

株式会社八木商店泰縣出張所

米山大三

東京市土田谷区東部第七部隊櫻川隊

二階堂暗三

東京市中央区若松町陸軍經理学校

中込令教隊幹部候補生隊第一階隊四区隊

菅瀬十朗

広島市西部第二部隊生野隊七班

金井雄吉

中支派遣補七三。四部隊若野隊

昭和十七年一月一日

東京市高科大会ア式蹴球部

堀尾貞一

東部七十七部隊隊部隊第八班

荒川守之助

宇部市東部第三十六部隊(班名不詳)

早野玄太郎

岐阜市中部第四部隊安時隊才二班

石割知之

神戸市藤田区片山町三丁目和車才廿班

清水陸美

世支派遣仁才八八。部隊轟垣隊

吉澤貞雄

新潟縣中蒲原郡村松町

東部六十八部隊李田隊也時班

鈴木英二

宇部市東部第四部隊安田隊奔候班

片山友夫

島根県浜田市西部第三部隊松本隊

松岡義彦

宇川市園町台東部七十四部隊倉隊

折下吾一

宇川市園町台東部七十三部隊保隊才六班

茂木利孝

京橋区小田原町三丁目海軍經理学校補習生一部三班